

山岸文庫蔵『古今和歌集聞書』翻刻（二）

西澤美仁  
牧野和夫  
杉山友美



前号（実践女子大学文芸資料研究所『年報』十七号「山岸文庫蔵『古今和歌集聞書』翻刻（一）」に引き続き、本稿では第二冊を翻刻する。

## 翻 刻

【凡例】（各冊において朱墨の割合に差があるため、朱墨表記に関する凡例は各冊ごとに定めることにする。）

一、本翻刻は実践女子大学図書館山岸文庫に所蔵される『古今和歌集聞書』（五冊）を底本として翻刻を進める。

一、本稿では第二冊を翻刻する。

一、原本の行取り、改丁に準じ、墨付丁数及びオ・ウの省略符号を付して〔1オ〕の如く示す。

一、漢字は原則として通行の字体を用いる。異体字（ㄱ、ㄴ）はそれぞれ（コト）、（シテ）と示す。

一、問答の頭左右に朱で合点が記されているが、（、）と示す。

一、頭書は朱で記されている。但し、以下に挙げる箇所は墨で記されており、その一部に記される合点も墨である。なお、翻刻本文上ではゴチック体で示す。（1オ「三吉野」・「二葉」、2オ「まめ男」、2ウ「羽林」、21ウ「潤」、28オ「井出の山吹」）

一、頭書の合点は、次の箇所（21ウ「潤」、28オ「井出の山吹」）のみであり、それらは墨である。また、問答の合点はすべて朱であるため、翻刻本文上で特別表記上の区別は行っていない。

一、声点、見せ消ち、訓み仮名の殆どは墨であるが、以下に挙げる箇所は朱で記されている。なお、翻刻本文上では「□」と示す。（2ウ「春かけて」・「みえむ」、3ウ「このめもはるの」、4ウ「たくへ」・「いだそ」・「うかりねに」、9オ「白妙の袖」・「白妙の衣」、9ウ「そてふりはへて」・「ぬきを」、10ウ「たつき」、11オ「道行」、12ウ「貫之」、13オ「かくる」、25ウ「上」、27オ「寺」、29ウ「卷二」、35オ「巢を」）

一、書名符及び朱引等は煩雑さを避けるため今回は省く。

一、傍注は本文より活字のポイントを下げて原本に準じ、傍記する。

一、虫損等による欠字分は□を以て示す。

一、一つまたは複数の「ヒ」をもって記されている見せ消ちは本文左傍に（ヒ）と示す。

共五

圓藏房

古今和歌集第二

元超蔵

古今和歌集卷第一

○春哥上

古今に付て 定家 家隆の二の読有而<sub>ニ</sub>定家ハ古今と読  
家隆ハ古今と読也付<sub>テ</sub>古今云<sub>ニ</sub>二義有一<sub>ハ</sub>には延喜以前の哥を  
集<sub>ル</sub>を古と云時<sub>ノ</sub>世の人々の哥を集るを今と云也二<sub>ハ</sub>には古とは  
神代を差ていひ今とは人代をさして云也和哥とは我朝  
の御法<sub>リ</sub>一切のあらき物こはきものに至るまで詞に和けて  
読故に和歌と云此和哥の二字に付て深儀有<sub>ニ</sub>字義ト集トは  
云書アリ集トは

数<sub>ヲ</sub>を尽す儀也卷第一は部類義也故に古今和哥集卷第一ト云也  
〔ふる年〕にはる立日トは仁和二年十二月に春立日仙洞の哥合によ

「 1 オ

三吉野

める在原元方か哥也元方トは業平の孫左衛門佐棟梁か一男  
時に左中弁歌の意は十二月に立春あるか故にとよめる也  
春立ける日トは延喜三年正月也是ハ延喜の御時八幡宮におさめ  
むか為に七百番哥合有ける時よめる哥也 袖ひちての哥に  
三季有序に如<sub>レ</sub>云 春<sub>ノ</sub>かすみの哥にたゝるやとはたてるか  
と云事也みよし野とは三吉野に三の所有上吉野中吉野  
下吉野は三<sub>ノ</sub>処を三吉野と云也此哥は清和の御時春日の宮に  
詣たりける時はるかに吉野の方を見やりて読給惟高  
親王の御哥也 二条の後春始の御哥とは二条の後の春宮

二葉

「 前表紙  
「 見返し

の女御の後也貞観四年三月に十四にて入内次の年の。二月に春の立ける日人々を召て哥よませ給ける御をは冬嗣フユツグの

御女の読給哥也彼をは嵯峨第七の王子者河原の左大臣融卿

の御室也二条の後とは大原中納言長良の御娘清和の女御也

此時清和は春宮の太子也雪の中に春はきにけりと云心也万

葉云降続し高根の雪の中に立春の気色は霞なるらし

文選云三冬未<sup>レ</sup>尽雪<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>新年四季兼<sup>テ</sup>先立<sup>タツ</sup>初春<sup>ノ</sup>影色

されは此文の意をよめり 雪の中に春はきにけりとは

年の中に春はきにけりと云也 梅かえにきめる鶯とは

梅かえにきてゐる鶯也此哥は昌泰二年十二月の立春に読給

中山ノ右大臣長年の御哥也忠仁公の一男也是は式部卿の宮として光

孝第四の姫宮也近江国高嶋と云処にましゝける所へ忍ひて

かよひ給ける時彼御所の梅かえに鶯の鳴を見て読給ける

哥也長年は彼姫宮の蜜夫也密夫とはまめおとも読した

おとこ共読也政纏云風妙也方君者靈王之臣下<sup>ナリ</sup>為天下ノ大見<sup>後見</sup>

正<sup>ニ</sup>賢<sup>コシ</sup>然而依<sup>テ</sup>為<sup>ル</sup>后宮呂宅姫蜜<sup>マメ</sup>夫空<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>境<sup>キヤウ</sup>知原<sup>チハ</sup>被誅<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>荒<sup>サカサ</sup>

## 羽林

郷之鬼<sup>シタラトコ</sup>文の意は靈王の臣下に方君と云者有時の羽林也

中將彼後は方君かめいなり其をおはして被誅<sup>テ</sup>成<sup>レ</sup>鬼<sup>ト</sup>さとをあら

す 春<sup>云</sup>かけてとは年の内の立春なれば。なり 雪の木にふ

りかゝるとは素性か宿所の木也素性は遍昭か二男俗名蔵

人義方廿一にて出家して清水法師となる後には長谷に住

けり権律師に任て是哥は清水にて読る哥と注せり春

たてはの哥にみえむとはみゆらんと云事也此哥は延喜二年正月

## 見えん

「 1 ウ

「 2 オ

題不知

あへす

おほいまう  
ちきみ

三葉

事

哥也題不知トは皆心有哥に云其事を書入。多キに依て題不知と云也 心さしふかくそめてしおりければとは雪の木に

降りかゝりたるは花ニにたる間はなはと心さし深く思ひて折てみれば雪きえあへすちりあへすとは消る程もなしと云早

くきゆる義也 万葉には不合ト書てあへすよめり 家隆に

は居ければとよめり是は花のさくかとして雪のふりかゝり

たる木のもとに居ければと云り此哥は御娘の染殿の后

内裏にまし／＼けるに参りて御まへなる梅木に雪の降

かゝりたるをみてよみ給忠仁公の御哥也忠仁公トは東山ノ関

白又染殿関白とも白河の関白とも云正一位上大政大臣良

房也此時左大臣也冬嗣の二男兄長良早死たると依て関白

と成る我朝の関白の始也自是人我朝に正一位絶たりおほいまうちきみとは三公ノ和名なり三公トは内大臣右大臣左大臣也

おほいまうちきみとは太政大臣也まうちきみとは大夫也 春宮の

みやす所とは清和春宮の御時事也正月三日とは貞観五年正月

なり雪のかしらに降かゝりけるとは晴たる空より村雲の

雪の降けるを云春の日のひかりにあたるとは春宮の女御

の御めくみにあたるを云頭の雪とは康秀此時六十也 霞

立の哥にこのめもはるのとはこのめのはるを春になぞらへたる也

春のはしめによめりとは寛平七年正月也藤原ノ言直時に

内ノ蔵頭越後介惟岡か男哥に別無義 春のはしめ。哥とは

延喜三年正月内裏の哥合によめる 春きぬとの哥は文集ノ鶯

賦の意をよめり文集云庭竹有レ音鶯舌告レ春ヲ苑松ニ

「 2 ウ

「 3 オ

風寒<sup>サヘテ</sup>鹿意悲<sup>カナシム</sup>冬<sup>フユ</sup>此意をよめる哥也 寛平の御時きさ

3ウ

いの宮とは照宣公御娘陰子<sup>ミコノカゲコ</sup>是七条の中宮也照宣公<sup>ミチノノリノミコ</sup>は長良

の二男堀河関白<sup>ムロカワ</sup>從一位上大臣也寛平<sup>ミチノノリ</sup>は宇多天皇御事也

哥合<sup>カガヒ</sup>は彼七条の中宮は哥を好<sup>ヨシ</sup>給ひて常に御哥合有<sup>アリ</sup>ければ古

今の中に寛平后宮の哥合と云事有<sup>マサス</sup>今此哥合は寛平

六年正月十一日哥合なり源<sup>マサス</sup>と云は是時は常陸守後には

右大将なり文徳天皇<sup>マサス</sup>孫近院<sup>ミチノノリノミコ</sup>右大臣源<sup>マサス</sup>能有<sup>アリ</sup>の一男 山風に

とくる氷の哥山風は当流<sup>タナリ</sup>余流<sup>ヨリナリ</sup>はうち出る波や春のはつ花とは

文選云天台山の高瀧に万浪成<sup>マンナミナリ</sup>花<sup>ハナ</sup>といへり此文の意也花のかほ

風のたよりにたくへての哥は延喜三年内裏の哥合の哥也

此哥は文集賦意也 文集云林花色々何<sup>ナニ</sup>由<sup>ユ</sup>好<sup>ヨシ</sup>山水<sup>サンスイ</sup>満<sup>ミツ</sup>来<sup>キ</sup>興<sup>キョウ</sup>

正<sup>マサ</sup>新<sup>シン</sup>窓<sup>マダラ</sup>過<sup>カサ</sup>枕<sup>マダラ</sup>ニ誘<sup>サツ</sup>フ梅風<sup>ウメカゼ</sup>ノ蔦簾<sup>ツタリ</sup>ヲ卷<sup>マク</sup>テ見<sup>ミ</sup>月<sup>ツキ</sup>盧峯<sup>ロホウ</sup>ノ曉<sup>キョウ</sup>一

詠一吟々詠<sup>ヨウ</sup>ノ客<sup>キヤク</sup>採<sup>サイ</sup>紙<sup>シ</sup>染<sup>シメ</sup>筆<sup>ヒツ</sup>伴<sup>ハナ</sup>侍人<sup>シヤウジン</sup>ニ此賦は春風鶯をさ

そふと云意を作りたくへとは便<sup>マツラヒ</sup>の義也万葉云 松浦姫

唐<sup>モロコシ</sup>人野事問天心<sup>ノコトヲタマフ</sup>便<sup>マツラヒ</sup>留風波伊多曾毛<sup>ルカセイトソモ</sup>されはたくうとは

便<sup>マツラヒ</sup>の字也松浦姫<sup>マツラヒメ</sup>は男の唐へ渡りしをまねきけるかまねき

死にしにけるよりして其山を松浦山と云伊多曾毛<sup>イトソモ</sup>はいだ

そはなんと云詞也 大江千里<sup>オホエ</sup>は其時にみのゝかみ後には中納

言大江の朝綱<sup>アサツナ</sup>の五男うくひすの哥は寛平九年の内裏の

哥合の哥也。うかりねに鶯のなくとは花のさかぬ程はうくひす

も物うげになくと云義也 野へちかくの哥は染殿の後の嵯

峨のほとりに御所作りて時にか。ひ給ひし時の事也あしたくと

云事を朝なくと云也△<sup>カ</sup>れは二の物のとものをつまよと云

朝なく

物うかるねに

いだそも

たくへて  
松浦姫

4ウ

4オ

若草の  
つま

いへるしをれと異本ニ有不審  
いわゆるせれはと云事也

春日野はけふはなやきそ若草のと云此哥に不審有問伊勢物語には武蔵野とはいひ爰にはかすかのと云此義如何いせ物語には正しく武蔵の国へ下るとみえたり此ちかひ如何 答云実には武蔵野国へ下らす春日の中にむさし塚と云所有其をむさ

し書き貫之此事を顕さむか為に春日野と書き此哥は長

良の中納言大和守にて奈良に住給ひける時二条の后ホクチャウ卜ム定の

女御にて内裏へもまいり給はさりける時業平ぬすみ奉りて彼春

許より尋て野に火をつけんとしける時後の読給へる哥也

抑春日野に武蔵塚<sup>ト</sup>みえるは日本記云文武天皇の御時中納言

美作朝臣と云人あり多年武蔵守にて在国したりけるか奈良

の京に上りて病ニ付テ死なんとしける時子をよひて云我武蔵

国に執心有思の外に此にて死はかはねを彼国におくるへしと云死

て後彼国へ送らん事難<sup>レ</sup>叶春日のすゑに埋てけり其後此人悪

靈と成て此事をうらみければ武蔵国より土を取よせて彼墓

を つ ゐ て 武 蔵 塚 と 名 つ く 其 墓 の ま は り を 時 の 武 蔵 野 と 云

今、の光台寺の後の岡是也。されは春日野中に正蔵野右之

義平は二条の后の爲こはつ来也又云告直云事母勢勿吾こ

美云平味の午へやる哥ニ云うあつかみぬはサエみゆるはつ

草を人の心すはんことをしそ思ふ反事はつ草のなとめつ

きこのはそうなく物をおもひけるかな文集云女の道ヲ男ニ明シ

きことのはそうらなく物をおもひけるかな文集云女の随<sup>レ</sup>男<sup>ニ</sup>如<sup>シ</sup>

妻ト云事

ひれふる

とふひの  
野守

レ靡<sup>ル</sup>ニ若草風<sup>ニ</sup>故に男<sup>ヲ</sup>ハ云風<sup>ト</sup>女<sup>ヲ</sup>ハ為草<sup>ト</sup>書りされはわか草<sup>ト</sup>ハ  
后也 問つまとは妻ノ字也多分女をいふ也爰に男

をつまと云事如何 答つまと云に三義有一妻ノ字をよみ

二には夫字をよみ三には調字をよむ女をつまと云事は常

の事也男を妻ニ云事万葉云遠津人松浦寵姫<sup>フマコニヒレアリシヨリヲヘルヤノナ</sup>

夫恋尔袖振紫余里負留山野名是は男の唐へわた

るを恋しかりて其舟のみゆるをまねぎけるかまね

き死にしにたり其より彼山を松浦山と云ひれふる

と云に二義有一には袖振義二には舞人のうちかけ

なむとのひれを云新撰六帖云醍醐の桜会の舞兒

をみて 玉柳ひれふりたてするうなひ子かなつる袖に

春風そふく是は舞人うちかけのひれ也三に調の

字をかける事は論語注云明王ノ代<sup>ヨニハス</sup>為<sup>ツマ</sup>調明臣<sup>フ</sup>是

字にては二の物のとゝのをるをつまと云

(約七行分余白)

されは夫婦共に調妻ト云 春日野のとふ火と云に二義有一ハ

大國<sup>トクニ</sup>燧<sup>ヒ</sup>ニ云事有是は都に不思議出くれば諸国にはやくしら

せんか為に都の四方に高く。塚をとふ火野と云京に事出くれ

は火をとほして四方の岡より指上る是をみつたへくとは

す程に諸国に知事程なくして都へ程なくあつまる是を天

智天皇の御時我朝にうつして春日山に野守を置いて京

に事出くれば火をとほさせけりしはしたえさりけれとも日

本は高下不平にして不叶して絶ぬ是を守をとふ火の野

「 6 ウ

「 6 才

守と云此野守は不退に野に居たるものなれば春日野の  
 若なは生たるか出てみよと云二ハ飛火と云は源氏注云昔山に  
 僧有念比に思ふ児有彼児死て後彼僧あくかれ出て迷

「 7 オ

ひありく程に奈良の興福寺の鳥にて鞠ける児をみれば  
 わかれし児に少もかはらず取よりてあひなるゝ程に互の志切な  
 り是僧白地に京へ出たりけるに元の師み付て 山にいて  
 登りて不出僧深く思入て歎きけり児も此由を聞て深  
 く歎きけり互に死ぬる事同時也又やく事も同時也け  
 れは彼僧をは坂本にてやきけり児をは春日野のすゑ  
 にてやきけり僧の火飛てならに來る児の火飛あかり

てあふ消此事正月十五日以前に日を不定して合事近  
 き世までありき此火北南へ別れは世中わろく西東へわか  
 るれば世中吉是を見ゆ為野守とて正月十五日以前には  
 春日野に人ををく若なをひたるか出てみよと云也此事

「 7 ウ

きえなくに

松の雪

あつぎ弓

ぬに都の野へには若なつむとよめり先降りたりし雪の  
 義也家隆には松の雪たにとかけり松の雪とは松は葉ほそ  
 く雪たまりかたし是雪にもきえぬにと読り此哥は七条  
 中宮の家の御哥合し給ひける時中宮のあそはせる哥也  
 あつぎ弓と云に三義有一ハ巫の口よするとてうへ弓を云  
 二ハあつぎの木と云木有其木にて作りたる弓也此辺にはち  
 きの木と云東にはあつぎの木と云三ハ陸奥国に足熊郡

と云所につくる弓也此弓は公家の年貢にも奉る弓也此  
義実義也此照宣公御哥也 仁和御門みこにおはしますと

云事古今に多<sup>ク</sup>余の物多<sup>ク</sup>此人さのみかくましますは何義そ  
と云に此人は五十まで御子にておはしましき故に御子御時の  
事物に多<sup>ク</sup>いれり陽成天皇物狂にまし<sup>ク</sup>ておりるにな

らせ給けるは彼みこ元良親王恒定親王等<sup>ニ</sup>位に

即奉らむとしければ此二人なから病まし<sup>ク</sup>ければ叶給は

す仁明天皇第三御子光孝御年五十に成給ふを位に

即奉らんとす臣下あまた申さく老人位に即給はん

事不可然とて不奉用右大臣長手卿しきりに即奉

るへきよしを申給ふさらはとて御車を以向へけるに若<sup>シ</sup>北

山の小松原の中に御所のあれは彼茂り生たる松さ

りて車をとをし奉らは王とし奉らむと不然は車を

かへすへしとて車にて迎<sup>ル</sup>松生てとをし

奉るさて位<sup>ニ</sup>付給<sup>ル</sup>何て小松の帝と号す仁和元年

御即位あれは仁和帝と申人に若なたひ奉るとは

僧正遍昭にたひける也此哥は御門にかはり奉りて

仕り給<sup>ル</sup>七条中宮御哥中宮は此御門に御よめ也<sup>ナリ</sup>

君かためとは遍昭ためと云意也歌奉れと被

仰しとは延喜御時古今を撰し給し時人々に

哥めしける時の事也 春日野の哥に

白<sup>〇</sup>妙<sup>〇</sup>の袖<sup>〇</sup>トハ国王大臣より外にてよます是は

直衣<sup>ナリ</sup>の白妙を云也た<sup>〇</sup>白<sup>〇</sup>妙<sup>〇</sup>の衣<sup>〇</sup>なんと読

帝王遍照を  
さして君ト  
の給ふ事  
四葉

白妙の袖

「 8  
ウ

「 8  
ウ

事は国王より外にそ不可有国王は銀膚シロカネヲノフ

金膚とて二の衣をめす也銀膚トハ白キヲ云金膚とは

やまはと色也されは白きに付て白妙之衣と云也

袖ふりはえて

そてふりはへてとは袖うちたれてと云文也在

原行平阿保親王の二男時に兵衛佐後には中納言

ぬきをうすみ

民部卿はなのきるかすみの衣とはぬきをうかすみ

とは次第ニかすみの衣ぬいてうすくなれは山風

へらなれ

にみたると云へらなれとはへき也かすみの衣と云

事は大方山なむとにたちきなんと可読共まこと

には其文の有によりていへり古曾書サツ云風ニ散ル

殘花糸ヅシ結レ雲ニ不レ断山ニ立霞ノ衣ハ峻テ枝ヲ織ル

霞レ此文の意をよめる哥也。源のムネニキ於時ニは

寛平七年三月の哥合の哥也源ノ宗于時に中宮ノ大

夫後中納言宇多ノ天皇第九ノ御子也ときはなるの哥

心は春は猶みとりにまされりと云是は白居易筆

遠霞色添。廬峯松楓月光所ノ名也増浜亭沙ニ此意也浜亭

ラ屋也哥奉れと云は上に哥めしし時の事也歌に

別義なし わかせこの三の義の事は如前

青柳の糸よりかくるの哥は別義なし 西大寺ニシノワフテラ

百千鳥

とは奈良の西大寺也哥は序如サ云

もゝちとりは二義有一サ百千鳥とかけり是へ一切ノ

鳥をさす云也百千は多数ナクかぬる義也春閑に来

「 10 オ

「 9 オ

鳥と云いかして也政經云上陽人深宮ノ春怨モ、サヘスリノ只百 嘯鶯ハス

たつき

息ヤスミ思ヒ是意なるなし此哥は春日宮ニ百首奉り給時  
読給延喜の御哥也 をちこちとは遠近とかけり万  
葉云海ノ野原野 波野ナハラノ 遠近空々ヲチコチアス、メニユカタタル目尔行方迷留末波知ユヘハシル  
賀毛此哥は吉備大臣入唐の時道にてよめる哥也 たつき「○○○」

よふこ鳥

とは便也後漢書云漢皇城閉 軍兵難サウレ通シ孝曹  
難レ行 其道無便タツキといへりされはをちこちのたつ  
きもしらぬとはとをひちかひのたよりもしらぬなり  
よふこ鳥とは或は猿を云といへり実にははことり  
とて三月なむとに山にある鳥也はこくと鳴也喚クワン  
子鳥ト書り是は伯撰カケト云文ニ委イいへり昔高麗ニ

「 10  
ウ

五葉

みち行ふりに

永蘭山と云山を女の子をいたきて通りけるか白地に  
さしすへたりけるを驚にとらてはやこくとなき  
ありきけるかなき死にシ。たりこの鳥となれり生をか  
へて鳥トなてもはこくとなく也仍喚子鳥ト名付  
此哥は但馬守に成て下りける時中山と云所ニと  
まりたりけるにかの鳥の鳴を聞てよめりけり  
猿丸大夫か哥也 こしへまかりける人とは藤原  
惟岡越前守にて延喜三年三月ニ下りける時の  
事也躬恒かともたちなり道行「○○○」ふりとは道行  
触とかけりそなたへ雪触れはと云意也 かへ  
るかりをよめりとは 宇多院御時内裏の哥合  
に読る哥也哥に別無義 おりつれはの哥は寛平

「 11  
オ

御時内裏の常寧殿トキナカノミヤの前の梅を立寄て折給ひけるに鶯の鳴ければよみ給七条中宮の御哥也  
哥カ無義色よりも香カこそ哀の哥は同御時哥

合に宇多院読給御哥也是哥は史記文意を讀り

梅香衣ニ薰ニ旧人之跡ト問非夢ニ非レ覺ニ恋慕ニ

涙ナミ告ツ神ミ先帝ノ紅顔何忘イカニシカハスレテカセン安ヤス年ト此文意は禹

の御門の王子に照鉢太子ト云人まし／＼けり女を心さ

し深くおもひ給へり彼女本國へ歸りける時彼太子

軒端ノキなりける梅のうつくしかりけるを袖にて

こき入てつゝみてかへりぬ程なく死ぬ太子此事をきゝ給て

歎無限しとて彼の女の國に尋行給て其家ニ行給

ぬ主はなくして空に衣の有けるを取て見給ひ

たりければこき入て包ヒたりし花もとのまゝ也

太子是をみて深く歎き給て遂ツギ本國へ還給

はすして出家遁世し給ふ彼女と云はたゝ人に

あらず彼國の王の姫宮母帝御門也照林太子の

色の深きを聞て彼にあはんか為にたゝ人の体

に成て太子の國に行てあひ奉れりとい

へり是よりして梅か香を袖にくむすと

云り必ず哀傷に読也 やとちかくの哥は

さきの梅の香袖に薰すと云意コトバを以てまつ

人の袖の香によそへてよめる也是は延喜第一ノ皇

子重明ノ王子北野ノ乙人ノむすめに通ひ給ひし

「 12  
オ

「 11  
ウ

老かくるやと

くらふ山

六葉

闇はあやなし

時久しく絶て後よみて遺す哥也 梅のは

なたちよるはかり有しよりの哥も同意をよ

める也二条の後の御哥也東三条左のおほいまう

ちきみとは嵯峨天皇第九の御子源の常の卿

なり是は梅花を折て貫之<sup>「フナニキ」</sup>にたふとて

読給哥也 鶯のかさにぬふてふ梅の花ト

さいはらの哥に 青柳の糸うちへ

てうくひすのぬふてふかさは梅の花笠此哥

の意をよめるなり老かくるやとは梅の花

笠此哥の意をよめるなり老かくるやとは梅の花は

年若き時<sup>の</sup>也花也是をかさしむ我身の老かかく

るトとよめり<sup>ヒ</sup> よそのみの哥は寛平御時内裏

の梅をよそののみ見てすきけるかめされて

かへりける時一枝折てよめり御門聞召て御感

あて緑たひけりと云り 梅の花折て人に

〔お〕かくるとは貫之か許へおくるなり哥に別義なし

くらふ山にてよみけるとは大和のくらふ山にて

よめる也哥に義なし月夜に梅の花をおり

てと人のいひけれは素性かもとより

こうなり哥に別義なし 闇はあやなし

とはえきなしと云事也かやはかくるトとは色こそ

みえずとも香はよめかくれしとの事也 はつせ

もうてのとは貫之<sup>ヒ</sup>常に長谷にまいるける也

13  
オ

12  
ウ

さたか  
故郷

くるとあく  
めかれぬ  
人まに

花のうつ  
ろふ

是は貫之は長谷の利生にまうけたりける子也  
上ニ如レ云カ房主トハ忠峯カ舅ヲチヤウ榮仙法橋也さた

かにトは定まて云事也故郷とは貫之か常にくる

処なれば云されとも実事ニハ彼所の名にふる

さと云名有其意をよめり万葉云御長

谷野布流里サヘテ吹風野セトにそひゆく

かねのありとも是ふるさとハ所の名也 水の

ほとりに梅花さけるとは伊勢西河のはた

に家を作りて住ける時宇多院花の妻<sup>安</sup>の為に

御幸なりたりし時読ル哥也伊勢は 伊勢守継陰か

むすめ藤原家ノ宗三位子也哥義なし 年をへて

の哥は同時よめる同人 家に有ける梅花トハ

貫之近江栗津ニ御家造<sup>ス</sup>棲ける時の事なり

くるとあくとは朝夕也是はあけぬくれぬなり

めかくれぬ目 別義也目ハナタス 一つのひとまに

とはいつの人のみぬまにうつろひぬらんとよめり

又ひとまとは一間の義の意なりいつのひととき

のまにと云心也万葉云 鹿鳴猪無野芝山朝

夕登霧立渡里不見日波猶行末毛心 尽天

野物思覽されはくるとあくとは朝夕の義也問花

のうつろふとは色のかわるを云ふ梅の花のうつ

ろふと云は色のかはるを云也如何 答やまふきなん

トハ色のかはるをうつろふといひ梅の花なんとは

14  
オ

13  
ウ

七葉

うたてく

ならはさら  
なん

すさめぬ

散を云長能か和名序云 散<sup>ウツコフ</sup>風花<sup>ハ</sup>帰<sup>レ</sup>根<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>待

残<sup>シ</sup>春<sup>ス</sup>帰<sup>ル</sup>谷<sup>ニ</sup>鶯<sup>ハ</sup>残<sup>シテ</sup>音<sup>ヲ</sup>入<sup>ル</sup>首<sup>ニ</sup>夏<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>万<sup>ノ</sup>葉<sup>ヲ</sup>

云 賤<sup>シスラツ</sup>男<sup>カシノ</sup>賀<sup>ノ</sup>柴<sup>ノ</sup>野<sup>カキヲ</sup>垣<sup>ノ</sup>面<sup>ノ</sup>野<sup>ノ</sup>卯<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>野<sup>ノ</sup>散<sup>ウツコフ</sup>賀<sup>セテ</sup>木<sup>カ</sup>末<sup>コスミ</sup>

野<sup>ノ</sup>青<sup>アヲク</sup>成<sup>ナリ</sup>行<sup>ユク</sup> 此哥は家持か哥也されはうつ

ろふ<sup>ト</sup>ちるを云也 寛平御時后宮の哥合

の哥とは 寛平七年春の哥合也此哥は七条<sup>中</sup>宮

御哥也哥<sup>(ニカ)</sup>□義なしちるとみての哥はちるとみて

さて有<sup>ニ</sup>へき。句ひの袖にまて花のわすれかたし

とよめりうたてとはうたてしう云事也是<sup>ト</sup>白樂

天<sup>ウラキ</sup>ノ春賦中ノ花部詩の意也林風<sup>ヤソフ</sup>誘<sup>ツ</sup>花<sup>ニ</sup>窓<sup>ノ</sup>

前<sup>ウラキ</sup>怨<sup>ミ</sup>梅香残<sup>ル</sup>袖<sup>ニ</sup>増<sup>ニ</sup>方<sup>カタク</sup>見<sup>ミ</sup>思<sup>シ</sup>此詩の意也

ちりぬ<sup>ミ</sup>ものの哥は業平忍ひてかよひ奉

りける時貞観十三年二月に備前にし

るよし有て下りけるに二条后の読て遣

す歌也是風の哥也義なし ならはさらな

む<sup>ト</sup>ちるといふ事をはならふ<sup>ト</sup>へからすと云也

人の家にう<sup>ヒ</sup>へりたる桜とは在<sup>侍</sup>時従時春

か東山に住ける家に植たる花のさきはし

めたるを云在侍従は業平の孫滋春か一男哥に

無義 山たかみの哥に人もすさめぬトは人も

あひせぬとの義也 問<sup>アイ</sup>常<sup>ニ</sup>には愛<sup>アイ</sup>せぬをすさむと

云人をすさむると云も人をさひしむるを

云也 なんと此哥に愛するをすさむると云哉

15 オ

14 ウ

みはや  
さん

答云今爰にあひするをすさむと云事はいさ

むる意也万葉云此野秋波君尔仕留暇

無身月毛不愛天夜々曾布留文集云

好女へ不飽嫁喜人愛一公主へ不飽賢悦

人善といへり又漢書曰漢氏恋忘婦

涙身へ如ニ在海中 小嶋ノ涙波常ニ懸テ沈難

浮一悔哉愛君日怨哉共契時は李夫人に別也漢ノ武帝ノ

歎給し涙床に積て如レ海書る也されは康秀李

夫人と云題にて恋になく涙の波の深に海にいさわ

れらさらはみるめかつかむいたくなわひて我我み

はやさむト我みてさかやかさむとよめりはやす

とはさかふる義也太平御覽云君子得タル賢其

家貧シテ其心楽シ少人ノ得愚其家宝ニ榮其心

脳物ラされはみはやさむとはさかやかさむと云

事也是哥は惟。親王遁世ノ後ニ小野ノ山寺に宮造り

て棲給ける所へまし／＼てさひしけに御座

けるをみ奉りて庭なる桜に結び給へる御妹生

子内親王の御哥也是風の哥也 山桜の哥は北山の桜を

みにおはすとて忠仁公の読給ふ御哥也哥に義なし

染殿の后とは忠仁公の御むすめ也さきのをほきおほ

いもうちきみとは大政大臣忠仁公也此哥は忠仁公六

十にあまり給ひて後御娘の后のはなやかにまし

ます事を悦ひてよみ給也 年ふれはの哥の

16 才

15 ウ

山の桜ひへ山也  
又 家つと

こきませて

心は我み年よりたれとも后をみたてまつ

れは物おもひもなしとよみ給へる也なきさの

院ト撰津国の水無瀬に有是は惟高親王のか

よひ給ひし所也此哥は葉平馬頭なしり時惟高

親王に仕りて御供にまいりたりし時よみ給

ける哥也意は世中に断て桜のなかりせは中くさ

くらを待思ひ散をおしむ歎きもなくて春の

心はのとけからましと読り家隆には不断桜

のなかりせはとよめり此義は桜の咲たれはこ

そ心くるしくもあれ不断にあらは春の心へのと

けからましと也 いしはしるの哥は朱雀院春宮

御時ト撰津国布曳の瀧にまいりたりける時

瀧のほとりの桜の水に枝のせかれて花のみへ

けるを御読してあそはせる朱雀院の御

哥也山の桜とは比叡山の桜也 家つとは土産の

義也花盛に京をみやりてとは東山に住ける

時京を見遣りてよめりこきませてとは深くまし

へてとの義也万葉云 薄濃色曾交留朝

日山紅葉野景波照増留良紫とよめり朝

日山ト竜田山のうちこし河内にありみやこそ

春のにしき成けるとは花洛と云意をよめる

也 文記録云榮帝ノ都以花ト陳順公ノ家ハ

因月ニ不葺レ文意ハ榮帝トいひし御門愛花ニ九重ニ

16  
ウ

17  
オ

足引の山

多ク植<sup>テ</sup>人門ことに花有<sup>仍</sup>何春都を花洛<sup>ト</sup>名く

是よりして一切ノ都を花洛<sup>ト</sup>名くされはみやこ  
をは春のにしきと云も花の多故にいへり是も

花洛の意也順公は月を面白<sup>カ</sup>て家を不<sup>フ</sup>葺<sup>ガ</sup>

桜のもとにて年のおひぬる事をなけくとは友則

か家西山<sup>ニシ</sup>すみける時の事也 色もかもの哥は桜

をかくし題にて読る哥也 たれしかもとめて

とはもとめての義也哥奉れと被<sup>レ</sup>仰<sup>シ</sup>トハ

延喜御時哥めしゝ時の事也けらしはけり也

山をあしひきと云に三の義有一<sup>ニ</sup>ハ大友皇子

葛木山を獵し給ける時白<sup>キ</sup>鹿を射給ひたり

ければ足にあたりて足を引てにけぬ何<sup>仍</sup>

て山をあしひき<sup>ト</sup>云二<sup>ニ</sup>ハ光仁御子<sup>コレニミタ</sup>惟<sup>フ</sup>條王子<sup>ホトナギ</sup>

廃帝王子と軍を遣し時筑前国大崎云

山にて彼廃帝王子足を射れてはひく<sup>ニ</sup>にけ<sup>義</sup>

給ひたりしよりあしひきの山と云皆是実<sup>義</sup>をを

かくせるか為<sup>也</sup>に実には日本記云いさなをいさなみ

の尊此国を造りて給けるに葦のしけりたり

けり何て日本を葦原中津国<sup>ニ</sup>云如<sup>レ</sup>此ならむ

にはいつくにか神達もすまむと云て二神あし

をひきすて給ひひきたるあとはぬま河谷と

なり引あつめてつもれる所は山となる故に山

をあしひきの山<sup>ト</sup>云 問<sup>ハ</sup>其義<sup>ヲ</sup>なしは谷河<sup>ニ</sup>なん

18  
オ

17  
ウ

山のかひ

「  
18  
ウ

とをも足引とよむへきか 答云彼谷河は引  
たるあと也山はあしのつもる形也されは  
あしの有に付て山をあし引と云山のかひ<sup>トハ</sup>  
山のあひ也五韻にて知へし雲を花に似りと云事  
本文有文選云白雲峯<sup>ニ</sup>立<sup>テ</sup>遠花添<sup>レ</sup>色春水

満谷松影深<sup>シ</sup>又長房記云雲<sup>ハ</sup>似<sup>レ</sup>花雪<sup>ハ</sup>如<sup>レ</sup>鶴

春色蒸々<sup>トシテ</sup>不<sup>レ</sup>尽とかけり万葉云 山桜

飽<sup>ク</sup>魔<sup>マ</sup>天色野<sup>ノ</sup>重<sup>ヘ</sup>波<sup>ハ</sup>谷<sup>ニ</sup>尔<sup>ニ</sup>毛<sup>モ</sup>尾<sup>ニ</sup>尔<sup>ニ</sup>毛<sup>モ</sup>懸<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>雲<sup>ニ</sup>

されは花は雲に似りと云 寛平の御時とは

寛平七年哥合也 みよしの<sup>ニ</sup>山<sup>ヘ</sup>にとは山の

辺にと云義也やよひに閏月のあまりけるとは

九葉

貞観十四年のやよひ也哥無義 桜の花

さかりにひさしくとはさりけるとは業平

有常か娘と夫婦なりし時京へみや仕しに

行たりしか二条后ををかし奉りて忠仁公に

三月かほとあつけをかれたりける時の事也

桜の花さかりにきたりけるとは貞観十三年<sup>ト</sup>

三年に勅勘ゆりてきたる也 あたなりて

なにこそたてれ<sup>トハ</sup>桜は七日に咲散物也<sup>ヒ</sup>

然に此花ちらぬ業平か来<sup>ル</sup>るニハ花も年に

稀なる人を待けりと読<sup>ル</sup>也此哥は有常か

娘の哥也きえずは有とも花<sup>ト</sup>みましやと

はちりしきたらん花は雪とのみ見へて花

きえずは  
有とも花

桜ハはるに  
咲散物也

「  
19  
オ

と見ましや

桜色に衣

\* 1

初葉

\* 3

トみえしとよめる也 散ぬれはの哥は  
南殿桜のちりかたなるを御覧してよませ  
給ふ七条中宮の御哥也哥ニ義なし おりと  
らはの哥も同人の御哥也紀の有朋トセハ長  
谷雄卿子友則か父也 さくら色にとは桜の  
色に衣をふかく染て春ト云桜の花見に  
来りける人とは貫之か来ける也哥無別  
義 亭子院とは宇多院御事也是は御所  
の名也七条坊門南小池の御所是也哥に  
義なし

(三行分 21 オを重複書写) \* 2  
(十一行分 21 オを重複書写)  
古今和歌集卷第二

○春下

春霞の哥は南殿の桜のちりかたなるを御覧して延喜御哥也  
哥に無義まてと云にちらてもの哥は二条ノ後の哥也内裏の  
哥合哥也ならひ次三首同人御哥也哥無義  
後人難云何ッ桜に思ひまさましと云は桜より面白物ノ有かと云り  
答云大方花は一旦の興也月ハかはらぬなかめなるに依て

月ハ花に増れりと見たり証哥 俊本卿の哥に云

春の花秋の紅葉もしはしまて月そかはらぬともと成ける  
されは月は花よりも興有と見たり

残りなくの哥にありて世の中はてのうければとはたとひ花は

19  
ウ

20  
ウ

21  
オ

空蟬

潤シツル

二葉

きえかてに  
ひとさかり

山の桜ひへ山  
又

ちるまを  
たにと

心ちそこなひて  
たれこめて

三葉

いつまでちらすとも我身のとまるましかければはてうしと云也

この里にの哥は二条の后大原に住給ける時読給ひける哥也

うつせみと云に三の義有一へ空蟬とかけり一には小蟬とかき

三には遷蟬と書り万葉云 ヤマカセヘイロカハラスヲヘキカヘン 山風波色不改雄萩賀葉野

宇津呂宇色ウツロウイロニウツゼイノ尔空蟬野無墓カナキカヲセウツコロカセ賀良毛猶殘留賀毛

万葉打聞也 ウツセミノコニキクトキツツヒヲクコノシタ 古撰云 坂上老女哥に 小蟬野音聞時曾露毛置木下

影毛打潤建留 カゲモウツシツレケル 三遷蟬トハ日本記ニ有是は夏より秋へ遷

る義也 空文字をうつと読事は文選云盜舜魯州

空人也又うつせみの世とははかなき世也此哥は染殿の内

侍の哥也染殿后のいとこ西三條左大臣良相の娘也

桜花ちらはちらなむの哥は惟高親王御出家の後小野宮籠

給ひし時読給哥也哥ニ無義 承均法師は貫之か猶子紀

文定か子也 桜ちるの哥にきえかてにとは消かたくすと云義也

花ちらす哥に無義 いさ桜の哥にひとさかりとは花とひとつ

さかりに我もちらむ世になからへは人にうきめみえなむと読也

あひしれりける人とは躬恒也哥にひとめみしとは人を一目見

には非す花を一目みて行し人を云也古今に山の桜トハ比叡山

の桜を云と可得意也 清原深養父トは于時肥後守但馬守通雄

孫又肥後守房則か次男春霞の哥に散まをたにとは散隙を

たにと云心也 心ちそこなひてとは心ちのわつらふと云藤原ノ因

香ノ朝臣とは是は于時内侍頭也右大将藤原経行ノ妹哥にたれ

籠てとはをろし籠てと云義也東宮の雅院とは内裏の侍賢

ことならは

しつ心なし

よきて

四葉

後惡靈と成給たりけるを蔽ひ奉る所也御河水とは内裏、朝きよめのちりはき入る河也常寧殿下より堀り流る河也

菅野高世とは于時式部日本武尊の孫藤原ノ古人ノ末忠輔か

子也哥無義 ことならはとは如此ならは元よりさかてこそ有

らめやかてちればと云也家隆には朝とならはと読り是はちるへき

朝ならは元よりさかてこそあらめと云也しつ心なしとはしつ

かなる心なしと云心也 桜のことく散物はなしと云人とは貫之

粟津に住ける時橘の為幹客人にて来りける時花をみて

とく散物なしと云聞て読也哥に人の心そ風も吹あへぬと

は人の心そ風の如くさわかしきと云是は文記録の文の心を読也

文云香爐峯ノ月清明ニ影不ス替一詠人厭ヒ雲ニ厭レ雨ヲ心ヲ早クシテ似

駿風一此文の心を讀也久かたのひかりのとけき春の日にとは延喜

の御時天下の長閑ナルを云也 東宮の帶刀の陣とは内裏の東宮の

座す方に有藤原ノ良風は于時帶刀の先生興風か孫忠繼か子也

哥によきてとはのそきてと云義也心つかからやとは心とちるをみんな

と云也 桜のちるを讀りとは内裏の南殿の桜をみて讀也

○無義 山たかみみつゝ我こしの哥は哥に無義 春雨の哥は

大伴ノ黒主清和の御時備前国へ吉備津宮の長官に成て下り

たりし時彼宮のさくらをみて読る也此哥に春雨のふるは涙

かとは白楽天賦の詞を題にて読る也其詞云仁風普潤花

薨ノ中此心也仁風とは春ノ風也普潤とは春の風の花を散すを

惜く泣く人の涙のうるはふ事を作り給賦也 桜花ちりぬ

るの哥は本文の心を讀也 文集云乱花似浪ニ碧羅天旅雁

22ウ

23オ

故郷の事

浮<sup>フ</sup>船<sup>フネ</sup>白雲<sup>ハクウン</sup>上<sup>ウヘ</sup>此詞の心也此詩は白樂天泉峯ノ桜をみせに王の遣し

たりける時泉峯<sup>センサン</sup>作りて王に奉る詩也雁<sup>ヒ</sup>を舟<sup>フネ</sup>を讀本文も

此詩也 ならのみかとゝは平城天皇也哥にふる郷となりにし

ならの都にもとは桓武ノ御時延暦十年歌に奈良の京を長岡の

京へうつす此時の御使は大納言藤原小黒丸左大弁同小佐

美丸二人也此時平城は春宮ノ大子にて長岡に住給ひけるか

ならに行給ひてやえ桜をみて讀給也故郷とはふるの京

なれは云ふるの京をふるさとゝ云事は内裏にては九重の

内をは皆さとゝ云又郷と云字をはみやこと云よみ有さと

みやこ同じ字なるか故にみやことをさとゝ云政經云風ノ姓方

死<sup>レイイコウ</sup>靈<sup>シ</sup>公後臣依<sup>シ</sup>犯<sup>ニ</sup>后宮<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>誅<sup>セ</sup>来<sup>ル</sup>荒<sup>アラス</sup>郷<sup>ノ</sup>鬼<sup>ト</sup>書<sup>キ</sup>りされはみやこと

さとゝは同じ義也又ならの京を古郷と云に二の義有一<sup>ハ</sup>ふるき

都なる故に云<sup>ニ</sup>湊<sup>ハ</sup>のかみの郡布留<sup>フ</sup>さとなるか故にふるさとゝ云

故にたゝ古郷と云は奈良の京と心得私の古郷詞をいひあらは

すへき也たとへはわか古郷共出しふるさとゝもいひあらはす

へき也されは古郷は吉野山のちかけれはと云歌は奈良の京の

事也平城御即位の後長岡の京は十年有て平ノ京へうつす

此時の御使も小黒丸淳和ノ御時より平ノ京は定りぬ 良峯の

宗貞は遍昭か俗名也于時右近衛ノ少将也哥<sup>ニ</sup>花の色は霞にこ

めてみせず共の哥は無義 寛平御時きさいの宮<sup>ト</sup>ハ七条の

中宮又は高藤ノ大臣の御娘胤子の女御と云義も有此哥合は

寛平九年の春の哥合也哥に花の木とは桜を云也春たて  
はと春<sup>ハ</sup>断<sup>タテ</sup>書<sup>キ</sup>りされは春のたゆるを云此哥の心は桜はいまは

花の木

「 23  
ウ

「 24  
オ

しかもかくすか

五葉

くれなはなけの

ありなめと

こと

あつらへつくる

うへし春くるれはうつるふ色に人の習にと云春の色の

哥は重明親王春日に参給ける時御供にて読給<sup>アイシシ</sup>貞信公<sup>アイシシ</sup>御哥也

貞信公とは昭宣公ノ第四ノ子小一条ノ関白從一位上大臣忠平也

重明は延喜第一の王子也哥に春の色とは春を云也さけるさかざる

花のみゆ覽とはさかぬ所へは散て行と云みわ山とは大和の三輪ノ

山也しかもかくすかとは普通ノさしもかくすかと云義也雲林院の

みことは嵯峨天皇ノ王子常虎ノ親王也 いさけふはの哥に春

の山へにまとひなんと春の山にまとひありきて花を見と云義也

家隆<sup>ニハ</sup>まとひなむと云是はあつまり居<sup>ル</sup>義也なけの花のかけかはとは

日くれなはなは無なる花のかけかはと云義也万葉云真金吹吉備野<sup>マカネツキヒノ</sup>

中山行月野無気野光尔跡照影といへりされはなけのかけ

とはなきかけかはといふ義なり

いつまてかの哥に花しちらすはのし文字はやそめ字也哥ニ無義

春毎の哥にありなめととはあるらめと云義也此哥は貫之か家

に哥合しける時古き文の心を書いて人々によませける時文集

の文心<sup>ヲ</sup>読<sup>ミ</sup>貫<sup>ル</sup>之<sup>ノ</sup>か娘助か哥也此助は延喜第七の宮友明の親王ノ

思ひ人也後には助内侍と云是也文に云縦<sup>ナカキ</sup>雖<sup>ナカキ</sup>レ<sup>ナカキ</sup>徳<sup>ナカキ</sup>三万春<sup>ナカキ</sup>一見<sup>ナカキ</sup>花<sup>ナカキ</sup>ヲ<sup>ナカキ</sup>待人ノ命ノ

長<sup>ナカキ</sup>ヲ<sup>ナカキ</sup>といへり此文の心也 <sup>花ノ如クニト云也花の如クニサカハスキシ昔ハ又モキタラントナリ</sup>

七条中宮の御哥也哥に無義 吹風の哥にあつらへつくる

とは常にあつらへつくと云心也此ひととは木の下也此哥は

清和の御時志賀の花見の御幸御供にてよみ給也国経ノ大納

言の哥也 待人もこぬものゆへにの哥はかみの本文を題にてよ

みし時の同し時の哥合の哥也文集云三春惜花<sup>ナカキ</sup>一聲<sup>ナカキ</sup>ト云

24ウ

25オ

ちくさ

六葉

治子

こゝら

ならなくに  
こまなめて

心也されは花を鶯も惜む意をよむ也

寛平の御時后の宮の哥合の哥とは上(カミ)に同し藤原ノ興風トは于時

因幡ノ大拯藤原ノ浜成ハナナリか孫治部ノ大輔道成ミチナリか子とす

咲花はちくさなからにとは千品チジヤ也花ことにと云義也 源氏ニ云

吉野山ちくさの花をかそへてやこす多ことにはうくひすのなく

此哥も木す多ことといへは木あまたの花を千品チジヤとさす也

春霞の哥無義 霞立の哥無義 花みれはの哥無義

鶯のなく野へことの哥は散たに有に風たに吹を惜て鶯の鳴

と読り本文上の三春の文のことし此哥は延喜三年に醍醐

寺を作り給ひて後に参り給ひける時道なる花に鶯の

鳴けるをみてよませ給延喜の御哥也次の哥同じ時よませ

給御哥也此哥無別儀典侍 治子朝臣トは左大臣源ノ常ノネの娘

嵯峨御孫也治子と書三の読有一 治子ニハあまねきこ第

三の義は家の口知事也哥に無義 仁和の中將トはその親雅と

不住或本には良方ノ中將を云と見たりみやす所の家の哥合と

は二条の後元慶ノ時の哥合彼中將を和哥所として哥を取

さはくらせ給ひし時の事也故に仁和中將のみやす所の家の

哥合にと云也藤原ノ後蔭ノチカケ于時左少將中納言 定か孫中納言

有穂か子也哥ニ無義哥にたつたと可読 ことたへはの哥に

こゝらとはおほき事多数字 書り万葉云慎木穴芝野山

野真葛多数野年毛苦気物於此哥は和大の乙丸か恋を

して読る哥也 しるしなきの哥無義但ならなくにと云事

は無にと云事也 こまなめてはこまならへてと云義也

「 25 ウ

「 26 オ

七葉

花つみ

ちりかふ  
山寺

此哥は忠仁公の讀て惟高ノ御子に奉<sub>ル</sub>是は志賀ノ花見にましませとさそひ奉る哥也

散花をの哥は延喜第八の姫宮用子内親王の御哥也別無義

花の色はの哥に我三世にふるとは我身世の中をふるいとまなきに

花をもみて散ぬと云是は業平と夫婦にて常磐の里に住し

時の事也 仁和の中將同上ニみやす処も同上ニ此時の哥合ニ元慶ノ

時也歌におしと思心はいとによられなんとは花の散ををしむ心の

乱れて花によると云をいとさくらになそらへて読るなり

散花山とにぬきてとゝめむとはいとさくらと云に付て読る也

志賀の山こえに女のおほくあへるとは延喜三年三月晦日に

志賀の花摘に行を云也此花つみと云は三月のみそかに必ず

内裏の女房たち散残る花を尋て合する事あり其を

云也此女ともとは在原滋春か娘源ノ当純か娘弁内侍源ノ彼

の娘正此人々也 あつさ弓の哥の道もさりあへす花そ

散けるとは女を花にたとへて云也寛平の御時の哥合上ニ

同シ春の野の哥に散かふとはちりまかふ也 山寺にまふてゝ

とは近江の石山寺也やとりしての哥に夢のうちに花そ

散けるとは延喜伝ノ中ノ詩の意也此詩台中納言橘ノ逸勢か詩と云

人有委く尋れば逸勢は古今已後の人也此詩実には橘の

始祖か詩と見たり其詩云春去夏来<sub>ヒトツ</sub>夢中ノ花未<sub>ナ</sub>去迎<sub>サツムカ</sub>月<sub>ツ</sub>

迎<sub>ヒトツ</sub>レ時<sub>ナリ</sub>其思<sub>ヒトツ</sub>一<sub>ナリ</sub>といへり此詩のこゝろ也

寛平の御時後の宮の哥合とは上におなし哥無義

志賀よりかへる女とは是も花つみよりかへる人也業平のいもうと

26ウ

27オ

八葉

いまでも

兼見ノ女王遍照いもうと在常か娘等也花山は東山に有哥無義  
家に藤の花さけるとは躬恒堀河にすみける時西三条の中  
納言藤原の知行かたちとまりてみるを云也是は良相の子也  
哥無義 いまでもと云は今も香はと云義也家隆には

今も昔しと云義也といへり橘の小嶋は宇治河の中に

こしまのくまとは隅と云義也かくれの義也是は宇多天皇の  
宇治に住給ひける時かしこへ読て奉る昭宣公の御哥也

あめふりける日山吹をおりて人のかりやるとは藤原の長平  
の大臣の許へやるとて読給二条の後の御哥也

あかなくに

あやなく

こなくに

井出の山吹

春雨の哥あかなくにはあかぬと云義也山吹はの哥にあやなは無益  
義也こなくはこぬにと云義也此哥は日本記に有是左大臣橘の  
諸兄山城の国井出寺を作りて廻廊に山吹を植たりけり内

大臣高向の迦留彼の寺をうつして光明山を立山吹を移し

て彼寺の廻廊にうへて彼迦留諸兄のへ使を以て云やる君の  
うへける山吹をうつしうへたるきてみ給へと云ければこむといひ  
てこさりける日読て遣<sup>ス</sup>迦留の大臣の哥也彼井出寺後津国に

移して作れり 吉野河の哥別無義 かはつなくの哥は嵯峨ノ  
天皇おりゐの御時承和二年の三月に井出ノ山吹みに座したり

けるに花散たりけるによませ給哥也此哥は共奉の臣下清友ノ  
卿の哥と注<sup>セリ</sup>是は王の御哥也と云事をかくす故也

春のとくすくるを讀るとは昌泰二年三月也哥に無義

九葉

やよひに鶯の声の久くきこえさりけるとは延喜元年三月也  
哥無義 やよひの晦日に山をこえけるとは昌泰元年に貫之

27ウ

28オ

まにく

\*4

たつこと  
やすき

肥前守に成て下りける時備前の中山をこゆるとて読也

花ちらすの哥にまにくと云に二の義有一はまゝにと云義也是は

花の散くるまゝにたつねゆけはと云義二はひまゝにと云義也

万葉云 白山野雪野間々爾萌出留草野千品尔春曾見建留

留といへり此哥のまにくとはまゝの義也 春を惜てとは元

慶七年三月もおしめとの哥に春霞かへる道にし立とは

春のかへる道に霞の立と云意也寛平の御時にトは同上

哥に声たえずとは声不断の義也 やよひの晦日と

は延喜二年三月也花つみより帰る女とは大江盛章か

娘滋春か娘等也志賀より帰る也とゝむへきものとはなしにの

哥に散花ことにたくふ心かとは帰る女ことに心のたくう

といへりたくうと云事同上ナしとは無にと云事也

やよひの晦日とは貞観十四年三月有常か許より藤の花を

こひければ折てやるとて読ル哥也 ぬれつゝの哥に春

はいくかもあらしと思へはとは春の残りはいくかもあらしと

云心也 亭子院の春のはての哥合とは宇多院の御

時寛平六年三月晦日の哥合也哥に無別儀但シ哥に

たつことやすき

(約三分余白)

古今和歌集卷第二

○夏哥 我宿の哥は聖武天皇の御時人丸大和国十市郡に家作りて

住ける時我家の藤の花をみて読ル也哥ニ無義

卯月にさける桜とは延喜元年卯月におそ桜の咲を云也

28 ウ

29 オ

29 ウ

うちはふき

二葉

またしき

五月まつ

花橋

尾花まねく

紀利貞トは于時侍從紀ノ有常カ二男 哀てふの哥は  
花のはかなく散と云事をあまたになさしとて春より後まで

さくかと読りひとりさくらんと云処に桜をかくして読り

五月まつの哥にうちはふきとは鳥の羽をうちはふくを云也此

哥は貞観十七年四月晦日にいまた郭公のなかさりければ郭公を

待て相坂山に行たりけるに読給人康の親王の哥也仁明天皇の

御子也 さ月こはの哥にまたしき時の声とはいまたさかりに

ならぬ声也五月待花橋とは大国には五月五日必ず橋を酒に入て

のむ也されは五月を待と云は花橋の袖のかと云に二義有一ニは

日本記云天武天皇の御時か百済国より橋を日本へわたす

王めておほしめして是を御袖につゝみ給ふ崩御の後彼御衣

を取出したりければ橋の香か袖に匂ふ其時参議岡丸と云

人御衣の御袖をかほに押当てなく／＼読る哥有其哥に云

なき跡の形見とてにや大君の衣の袖にたちはなのにはひ

はかりをのこしをきけん 又漢書云淚雨漸潤興芳七尺之

盧橋纔伝古袖頭髓貫脈苑雀二丈之薄花速迷後心一

といへり文の心は漢の武帝の御時田夫興芳夫婦アリ妻ノ興芳死テ

後男七日を経て彼墓を見ル墓より橋をひたりなかさ七尺也

其香別れし妻の有香に似り袖に其葉をこき入て家に

帰りぬ此香うせすして後迄有此ニ意を以テ花橋の袖の香

を昔の人によせて読也又苑雀婁州とて夫婦有妻の苑雀

物をねたみて野に行て死ぬ男尋てありくに二丈はかりなる

尾花我をまねく行てみれば彼妻のかはねより生出たる

30ウ

30オ

宇佐ノ勅使

なくなる

からなん

郭公夏出ル

はた

郭公ニ十種ノ  
名アリ

薄<sup>ス、キ</sup>也是よりして尾花の人を招<sup>マシケ</sup>と云事を讀<sup>ミ</sup>り此五月まつ

の哥は貞観十三年四月に清和の御時業平宇佐ノ勅使に下り  
たりける時小野小町業平の妻にて有しにはなれて後宇

佐ノ使承官<sup>コシヤキ</sup>人大江惟章<sup>カ</sup>妻<sup>ニ</sup>成てかしこに有と聞て業平<sup>ヲシナ</sup>女あ

るしに見参せんと云ければ小野小町か読て出す哥也いつのまに

の哥は四条の後の御哥也哥に無義但<sup>シ</sup>なくなると可<sup>レ</sup>讀今朝

きなくの哥は延喜の御時内裏ノ哥合に読給河原院ノ左大臣

融卿<sup>トメル</sup>ノ娘御哥也此哥の心は郭公は昔を恋<sup>ル</sup>鳥なれば橘も昔の

香に匂ふ物なれば橘に宿をかると読<sup>ル</sup>也文集云郭公去<sup>テ</sup>南

寿<sup>シユ</sup>再<sup>ニ</sup>不<sup>ラ</sup>帰<sup>ラ</sup>常思<sup>テ</sup>旧里<sup>コノサト</sup>栖<sup>ス</sup>橘樹<sup>キハツ</sup>といへり文の意は郭公は靈州の

民なりしか舟に乗て海を渡る程に南風にはなたれて北国<sup>キタクニ</sup>来

る寒にたへずして死にぬ生をかへて鳥となりたれともあたゝ

かなる時を待て夏里に出るといへりされは古郷を恋しかり

て木の南の枝にすをくひ橘をなつかしかりてすむと云り

音羽山とは近江に有哥に無儀 郭公初音きけはの哥に

ぬしたまらぬ恋せらるかたとは郭公とはつまを恋る鳥

なるか故に其声を聞は誰をともしき恋かせらるゝと云也はた

とは將にと云義也万葉云<sup>イニシヘノツマヤコイシキホトキスナワヨスカタ</sup>古<sup>コ</sup>野妻<sup>ノツメ</sup>野恋<sup>ノツメ</sup>氣<sup>キ</sup>郭公夏<sup>カキ</sup>野終夜<sup>ノツメ</sup>

鳴<sup>ナリ</sup>明<sup>アカ</sup>覽<sup>ミ</sup>又文選云思<sup>シ</sup>未<sup>ミ</sup>休<sup>ユ</sup>恋<sup>コイ</sup>鳥<sup>トリ</sup>別<sup>ワケ</sup>恋<sup>コイ</sup>旧<sup>コノ</sup>妻<sup>メ</sup>鳴<sup>ナリ</sup>不<sup>フ</sup>断<sup>ツグ</sup>文

文意は郭公は大唐の人成けるか最愛の妻<sup>メ</sup>国王にとられて

恋死にして後鳥となりぬ必ずとられたりし時を思出て鳴と

云されは恋する鳥と云也郭公に十種の名有一<sup>ヒト</sup>郭公<sup>カキ</sup>二<sup>ニ</sup>時鳥<sup>トキトリ</sup>

三<sup>ミ</sup>苦<sup>ク</sup>歸<sup>キ</sup>樂<sup>ラク</sup>四<sup>シ</sup>三<sup>ミ</sup>月<sup>ツキ</sup>過<sup>ス</sup>鳥<sup>トリ</sup>五<sup>イ</sup>してのたおさ六<sup>ム</sup>くつてとり七<sup>ナナ</sup>へうないこ

31ウ

31オ

ハニ過時不燃鳥九<sup>ハ</sup>恋鳥十<sup>ハ</sup>別遁度幾寿此外ニ二種の名有

一ニハラムル鳥ニ<sup>ハ</sup>イモセトリ也一<sup>ハ</sup>郭公者文選云<sup>タ</sup>郭州ノ蘇公<sup>ソコウ</sup>ハ人ニ被<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>榮<sup>ニ</sup>

世長茂<sup>セイ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>貧<sup>ニ</sup>鏡<sup>ケ</sup>ニ<sup>ネン</sup>年ノ終<sup>リ</sup>ニ託公<sup>タクコウ</sup>発<sup>レ</sup>軍<sup>イクサ</sup>蘇公入<sup>レ</sup>海<sup>ニ</sup>一世愁深<sup>ウレヘ</sup>常<sup>ニ</sup>

流<sup>カス</sup>紅涙<sup>コウライ</sup>文の意は郭公昔郭国の王なりしか余<sup>ニ</sup>さかへて民の

愁を不<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>並<sup>ニ</sup>国に託公と云人軍を發してとらへて海に

入てころしぬ生を替て郭公になれりされとも昔の思ひ不忘<sup>一</sup>

して今も鳴といへり余鳴時には紅涙をこほすと云故に

此集にもから紅にふり出て鳴とは紅涙のふり出でと云也

郭国の君なるか故に郭公と云ニ時鳥とは時を定て鳴故に

云也三<sup>ニ</sup>苦帰樂とは此鳥は地獄にかよふ鳥也地獄に有時は苦也

娑婆に帰ては樂也苦帰樂と云万葉云

嶮路山越行北野采野原己毛苦登帰樂鳴也又家持か窮<sup>キウ</sup>

題集云聞賀羅爾音曾悲<sup>タイ</sup>幾<sup>タイ</sup>死路山越<sup>タイ</sup>天夜波来苦帰樂<sup>タイ</sup>

天<sup>テ</sup>宇<sup>ウ</sup>鳥<sup>トリ</sup>四<sup>ニ</sup>三月過鳥ト夏三月鳴過<sup>タイ</sup>す故に云也源氏云

鳴ふるす音そひさしき我宿のまかきにつたふみつこすこ鳥万葉云

大里野富野更河見渡波己高峯来鳴三月過鳥

大里<sup>オホサト</sup>富野<sup>フノ</sup>更河<sup>ミカワ</sup>見渡波<sup>ミワタセ</sup>己高峯<sup>ミタカミ</sup>来鳴<sup>キナミ</sup>三月過鳥<sup>ミツコスツトリ</sup>

う  
な  
ひ  
こ

タノヲサトナツケレホト、ヤストソナエタルナ  
田野田長登名付氣礼柄田早來子登曾鳴渡留南留

又古今集云幾々の田をつくれはか郭公してのたをさを

朝なくよふ此等は皆田を催す鳥と見えたり万葉注云郭公は

昔田を作る人成けるか死後此鳥となれり田作る比になれば

田作に早來子と人催す鳥也と云也二義有といへ共しての

田長の義は多分田夫の義を旨とす六くつて鳥と云に二

義有一くつてとは堀田と書り田をほれと催義也同上

二大和物語ノ注にくつぬひの義を明セリ郭公昔人にて早里と云

処にてくつを縫てうりける程に穂斗渡幾寿と云人踏を

をきのりて價をなさす共に死て鳥となる郭公は今の百舌

鳥と云鳥也其あたひをはたらんか為に郭公と人の名を

よふ程に自か名いひなされたり故に此時は郭公に百舌鳥

かくるゝ也七うなひこは此郭公は死路山を越る程はおさなき

童にて越えつれば鳥となると云万葉云

シテノ山路哉露氣幾童子賀打垂髪野五月野空八過時

不燃鳥とは人を催す鳥也九恋鳥とは恋をする鳥也

上に如云一別遁度幾寿とは地藏十輪經説也此ほとゝきすは

地藏の化身にて人を勧めて幾寿をわたるそわかれのかれよと

鳴といへり此意を保胤かいもうとの孝養の願文に書り世尊

照世大悲月普朗四海薩埵勸人誓願鳥広勸穢土書

今此誓願の鳥と云事は此別遁度幾寿をさす言葉也 又

宇治殿の記云地藏上人地獄へ行給たりけるに延喜御門

御座けるをみ付奉て恐給ひければ御門言地獄には無罪為

「  
33  
ウ

「  
33  
オ

上ト有<sup>リ</sup>罪<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>下<sup>ニ</sup>汝我敬<sup>ラ</sup>事なかれ上人問<sup>テ</sup>云依何<sup>ニ</sup>此苦を受給そと

云御答云我依無実<sup>ニ</sup>菅承相<sup>ヲ</sup>流<sup>ス</sup>依此罪<sup>ニ</sup>墮<sup>リ</sup>上人

言<sup>ハク</sup>娑婆にて何なる勤にてか此苦を通給へき答云別遁

度幾寿娑婆に無常を告<sup>ケ</sup>是を聞<sup>カ</sup>ハ必世を通心有へし

依<sup>ニ</sup>生死を離<sup>ル</sup>へし答給又ラル鳥とは地獄より娑婆へ

来<sup>ル</sup>時は毛むくくとしてかはきぬに似たりと云さむき時は

木のうつろ岩の中にはい入て毛むらくくと有をかはきぬに

似りと云也又いもせ鳥ト夫婦の中を恋<sup>ル</sup>鳥と云義也上<sup>ニ</sup>如云<sup>カ</sup>

ならのいそのかみ鳥ト天武天皇ノ御願所也哥<sup>ニ</sup>無義

夏山の哥に物おもふ我にこゑなきかせそとは郭公は恋す

る鳥と云に付て読り此哥は内大臣高藤ノ卿忍てかよひ

給けるか絶てみえさりけるに読て遣す藤原ノ国経ノ娘

の哥也 郭公鳴声きけはの哥にふるさとさへそこひ

しかりけるとは上にて旧里を思<sup>フ</sup>云本文の意也此哥は大江の

忠名清和ノ御時依<sup>テ</sup>無実<sup>ニ</sup>讃岐ノ八嶋になかざるかしこにて郭公

の鳴けるを聞てよめりと云忠名か哥なり 郭公なか

なく里とは二義有<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>名<sup>ナ</sup>。をなくといへり二<sup>ナ</sup>長鳴<sup>ナカ</sup>といへり

此哥の意は一<sup>ツ</sup>さとならず鳴ありけは我のみたのむへき

にはあらねとも猶うとまれぬ思と云此哥は小野小町か男あまたか

よふと聞けれともなをうとまれすに思と業平かよめる哥也郭公は

嫁にたへすして男あまたもたる鳥也されは余切なる時には鶯

にも嫁といへり小野小町も如此と云 里のあまた有とはさとは人

のやとり也小町はあまたの男の宿りなりと云意を里のあまた

なかなか

郭公鷺に  
とつく

小野小町かコト

「 34  
ウ

「 34  
オ

しやか汝也

思ひ出時はの  
山の

時平大臣

袖ひつる  
ひつを  
からなん

あれはと云也文選云郭公<sup>ハ</sup>恋<sup>テ</sup>旧夫<sup>ヲ</sup>不堪<sup>ク</sup>嫁<sup>ニ</sup>と云り故に  
鶯にも嫁と云古哥に云 鶯のかひこの中の郭公しやかちゝ  
にててなくかしやかはゝにててなくか 文集云嘶胡馬

北風巢を鳥南枝文の意は漢の明帝の御時胡国の鳥を  
取り唐に來<sup>ル</sup>古郷を恋て北の風の吹時には嘶越鳥とは

郭公也此は越国の人也しか越王の后を犯<sup>ヲカ</sup>して北国に流れて

死て後郭公となる彼後の事を不<sup>レ</sup>忘して今も巢をくう時には

木の南の枝にすくうといへり是も嫁にたへぬ心也思出る時は

野やまの郭公とはあまねき郭公の義也<sup>裏書云野山ニノ様有ケナシ</sup>  
<sup>山ヲハ野山ト云今一ハ面ニアリ</sup>

家隆には常葉の山と云からくれなるにふり出て紅<sup>ヒ</sup>の涙をなかつ

を云本文同上<sup>ニ</sup>此哥は日本記云右衛門守源ノ正隆よき妻を

持たりけるを本院ノ左大臣時平卿おし取て妻<sup>メト</sup>し給其後

五六年過て正隆大納言に成て悦<sup>シヘイ</sup>ひ申<sup>シ</sup>昭宣公ノ許<sup>トニ</sup>参り

たりけるに四五年なりける若君のとられたる妻に似<sup>タル</sup>カまし

くけるを怪<sup>アヤシ</sup>みて人に問ければ答云是は昭宣公ノ御孫本院ノ

若君也<sup>ト</sup>云さては我とられたりし妻ノ子なりけりと思て

小指<sup>コサビ</sup>くひ切て其血<sup>ニテ</sup>若君のかひなに書付<sup>テ</sup>女房是<sup>ヲ</sup>みて深<sup>コ</sup>

歎<sup>ナガメ</sup>忍ひてあひ給ひけりといへり彼おさなかりし児後<sup>ニハ</sup>富<sup>トミ</sup>小

路ノ左大臣顯忠<sup>アキ</sup>といはれき時平は昭宣公の一男也正隆は文徳天

皇ノ孫近院右大臣能<sup>ヨシ</sup>有<sup>アリ</sup>二男也 声はして涙はみえぬの哥に

ひつをからなむとは袖潤<sup>ヒツル</sup>義我衣手のぬるゝ義也からなむとは

ぬるゝからと云心也此哥は陽城院第四ノ姫宮懿子<sup>イシノ</sup>内親王

の津国に住給ひける所にみや仕奉らむか為に行たりけるか見

「 35  
オ

「 35  
ウ

三葉

おりはへて

三国の町ト

云女

やややまで

四葉  
とゞろ

たふへける

酒を三寸ト  
云り

奉りて恋奉りける此郭公の鳴けるを聞て読ル哥也藤原、  
惟岡<sup>ヲ</sup>哥也、足引の山郭公の哥におりはへてとは折を得た

る義也是は我も物思折を得て郭公も鳴と読り此哥は

文徳天皇ノ染殿ノ后をすさめ奉りける比読て皇に奉ける

哥也いまさらにの哥は忠仁公ノ御哥也哥無義 三国ノ町トは紀の

利貞か娘也町トは女官也哥にやややまでとはやゝしはしまて

と云事也我世中に住侘ぬとよとは三国の町の娘の死

たりける事を思ひ出て読ル也郭公はよみちかよふ鳥なれば

我世中に住わひたりといひやらむしはしまてと云也

寛平の御時の哥合上ニ同シ五月雨に物思ひをればの哥は友則

老後ノ哥也別ノ義なしやとりせしの哥義なし 夏の夜の

哥義なし 暮るかとの哥義なし 紀秋峯トは紀能人か子

于時若狭守 夏山の哥上の恋鳥の心を読ル也去年の夏の哥

は清和ノ御時北山ニ庵<sup>リ</sup>結<sup>ヒテ</sup>住ける時郭公の鳴けるを聞読給

貞信公の御哥也哥無義 五月雨の哥にとゞろとはうこくを云

史記云 秦始皇暴惡銘<sup>シテ</sup>肝<sup>キ</sup>殺<sup>ス</sup>内官<sup>ニ</sup>外官<sup>ヲ</sup>宮中ノ動<sup>ト、ロト、ロ</sup>揺<sup>キテ</sup>無<sup>シ</sup>シ<sup>シ</sup>カ<sup>ル</sup>閑<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>サ<sup>フ</sup>ラ<sup>イ</sup>ニ<sup>テ</sup>ヲ<sup>ノ</sup>コ<sup>ト</sup>モ<sup>ヲ</sup>ホ<sup>ミ</sup>キ<sup>キ</sup> たふへけるとは

延喜ノ御時殿上の若<sup>キ</sup>人々を召て酒をたふを云也紀貫之于時

肥前守也刑部少輔藤原雅賢<sup>マサカタ</sup>躬恒等也酒<sup>ツ</sup>みきと云に二義有

一ニハ三寸ト書てみきとよめり是は馬の一<sup>ヤ</sup>寸<sup>チ</sup>二寸<sup>ニ</sup>云<sup>コト</sup>とし吞ぬれ

は風三寸身に近つかす二<sup>ニ</sup>三<sup>ホ</sup>木<sup>コ</sup>と書り 文記録云<sup>タ</sup>石<sup>タ</sup>祚<sup>ヲ</sup>得<sup>テ</sup>

三木<sup>ヲ</sup>助<sup>テ</sup>天命<sup>ヲ</sup>荒<sup>ニ</sup>児<sup>ニ</sup>銅<sup>テ</sup>一<sup>ニ</sup>犬<sup>ニ</sup>伐<sup>ニ</sup>公<sup>ニ</sup>敵<sup>ニ</sup>文<sup>ノ</sup>意<sup>ハ</sup>漢<sup>ノ</sup>明<sup>ノ</sup>帝<sup>ノ</sup>御<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>天<sup>ノ</sup>下<sup>ノ</sup>

旱魃<sup>ス</sup>或は七年都に水たえて貢御たえたり爰<sup>ニ</sup>石<sup>ニ</sup>祚<sup>ニ</sup>か家<sup>ノ</sup>

36  
才

36  
ウ

酒を竹葉  
と云り

やまひこ  
人まつ山  
うちつけに

はや住ける所

むかしへや

われとはなしに

そのに三ツまたなる桑の木有水鳥常に來て居る石祚

思はく水鳥のかよふは水のあれはこそとて行てみるにまた  
の中なるうつほに竹の葉を折てをゝへりあけてみれば水たゝ

へたり吞てみれば酒也一度吞は七日物ほしからす是を御門に  
奉る王の貢御なかりけれとも水にうへ給はず故に天命を

助くと云此故に酒をみきと名付抑此酒ノ出來る事は石祚  
に子あり継母にくみて廉食をあたへくう由して彼ノ木ノ穴ニ

入レ置テ年月を経て酒と成り人に見せしとて竹の葉を  
折てをゝへり仍テ竹葉と名付酒に七種の名有三木

竹葉 萩花 忘憂 白散 長命 款冬也 忘憂とは  
酒を吞は憂を忘るゝを云也白散とは酒を吞は病をさるを云也

長命とは酒を吞は命を延る也款冬は孝徳天皇酒を好みて  
世の政不レ直 仍 臣下計ヒテ 酒を止 王坪ノ内に酒を埋て款冬を植て

酒のほしき時は款冬見にとて行て酒を吞給故に酒を款冬と  
名付郭公の哥にやまひことはこたま也 樹神 郭公の哥に人

まつ山とは延喜二年五月に大神宮の勅使に下りける時伊勢ノ  
代松山ニ郭公の鳴を聞て読ル也うちつけにとは卒尔ト書り古撰

云中河野水古曾濁礼卒尔々雨津留雨野雲毛晴無具  
うちつけに恋まさるとは恋鳥の心也 はやくすみける所とは

久くも居ぬる所也是は春日に詣て歸りける時忠峯か伯父  
榮仙法橋か許に立寄たりけるに郭公の鳴ければ読ル也是は

奈良也 古や今も恋しきの哥に故郷とは奈良を云也郭公われ  
とはなしにとは郭公われにてなきに浮世の中に鳴はといへり卯花

37 オ

37 ウ

かたへ涼しき

はうきといわんか為也 蓮葉の哥に序ニ如云一夏の夜の哥無義  
となりよりとこ夏こひにをこせたりけるとは躬恒か堀河の家の  
となり也平の定文か家よりこえり ちりをたにの哥無義

裏書ニ云いもとわかぬる床にちりをすへしと云心也みな月の晦日トハ

昌泰三年の六月晦日也夏と秋との哥にかたへ涼しきとは

旦々とすゝしきと云義也

(約四行分余白)

古今和歌集卷第四 ○秋哥上

秋立日とは貞観七年の秋也 秋きぬの哥に無義 あき立トは

寛平九年の秋也うへのをのこ共トは躬恒貫之友則滋春等也

うへのをのこ  
共  
せうえう  
三義

せうえうと云に三義有 源氏には悦ひをいひ日本記伊勢物語には

遊トを云古後拾遺には王の恵ニ云源氏ニ云柏木ノ衛門ノ督ノ権を奉りたり

ければせうえうの日の体にうけ給と云せうえうとは祝用ト書リ

祝用の日なむと云はみな祝を云也古後拾遺にせうえうとは照耀

と書リ是は国王の御恵の光を云長能記には戴霜ツ戴星ツ雖トモ経

六句ヲ未レ遇ニ照耀ノ恵ニ書リ今此古今に書処は遊トの義也古今道

遙の義也 河風の哥無義 わかせこの哥は光明皇后の御哥也

哥無義昨日こそこの哥は惟高ノ親王の御哥也此哥は本文の心を

読ト也漢書云昨日ハ林葉ノ払露ヲ待チ秋友一今日ハ山花穿レ霞ヲ語春

契一果年一隔レトモ日ヲ往好情未尽得ニ深々タル中ニモ猶尋跡波ノ上ニモ伝レト書ヲ文

是は称鴻といひし人漢ノ武帝王子ト志深ク契リスさきの年の秋紅葉

さかり成り時互ニ深遊ヒテ次年春称鴻事有て遠キ国に流彼王子

人にかくれて雪の深キニ尋来リ船の便にも文をかよはす其事を悦て

└ 38 才

└ 38 ウ

└ 39 才

七夕宮に

書て奉る文也必ず昨日は秋今日は春にてはなければとも月

日の早うつる事をいわんか為に昨日秋今日春と云されは此哥

昨日さなへ取しか秋風吹と云も月日の移りやすき意を讀り

此哥は惟高親王の遁世の後読給哥也又万葉云 栢結葛木山

越昨日見天花爾戲紫吾袖野今日波寒建幾風尔毛有哉

是人丸の哥也此哥も月日のはやきを昨日今日と読也秋風の吹

ぬるの哥に久かたのあまの河原にたぬ日はなしとは是は貫之か

歌也是は筑前国大崎事あり彼二宮中に河有其河を天

の川といひ辺りをあまの河原と云男はしくおもふ女はたなは

たの宮に籠り女はしき男はひこほしの宮に籠也七月一日

より七日まで籠て夜半に河中に棚をゆひてたらい三ッ

をならへて水を入れて置三ッ椽上中下をも書三ッ椽の中に

おもふ男の名をも書也又あまたおもふ男あれば三ながらに其名を

書也かくして七日夜半に祭をして星合の影を見必ず

三ッ中ニへにうつる也それをもて何なる男女共にしる也久方の

あまの河原渡守とはかさゝきを云序ニ如云たなはたの事序の

注に委見 必ず舟に乗渡事はなけれ共河を渡義を以て舟の

梶の心地を云也能因秋百首序ニ云鳥鵲ノ舟路幾年ノ渡ルニ星ノ思フ文

されは必ず舟にてなけれ共渡義を以て舟と書り此哥は融大臣ノ娘の哥也

天河の哥に紅葉を橋にわたせとは紅葉の橋の事序の注に如云

たなはたつめはたなはたつま也五音を以てよめり此哥は清和ノ御娘ノ選子

親王の御哥也 こひくゝの哥無義是は貫之か哥也寛平の御時とは

寛平三年七月七日内裏の哥合也上ののこともとは殿上人也

上ののをこ  
とも又

たなはた  
つめ

40  
オ

39  
ウ

あき瀬

かしつる糸

年の緒

三葉

いまこむ年

心つくしの秋

貫之 友則 滋春 定文等也人にかはりてとは御門にかはり奉て

読也哥にあまの川あさせしらなみとは朝瀬と書り此心にてはこよひ  
相なは朝たかへらんする瀬をもしらすといへり又浅瀬ともいへり此心

にては瀬の浅き深きをも不<sub>レ</sub>知と云心也后の宮の哥合とは七条の

中宮也哥無義 年毎の歌無義 七夕にの哥にかしつる糸とは

はたと云に付て云也年の緒<sub>ヲ</sub>とはいのち也 こよひこむの哥は八幡<sub>ノ</sub>

別当玄命<sub>ノ</sub>娘にかよひける時こむと云て有ける夜折しも七夕

来ければ読<sub>ル</sub>哥無義七日の朝とは延喜五年七月七日の朝<sub>タ</sub>也源の

宗<sub>ノ</sub>于<sub>ニ</sub>時中将宇多院ノ御子也哥無義 けふよりはの哥

にいまこむとは又こむ年也 このまよりの哥は承和十二年の

秋内裏ノ南殿に天皇三月<sub>ニ</sub>不過定死<sub>ト</sub>書<sub>テ</sub>落書<sub>ニ</sub>したり是を委<sub>ヲ</sub>

尋<sub>ル</sub>藤原ノ守房か手跡也とて薩摩国<sub>ニ</sub>流さる彼国なる山里に

住侍ける時読<sub>ル</sub>哥也心つくしの秋はきにけりとは秋<sub>ハ</sub>無常の季<sub>ナル</sub>

か故に秋をは心つくしの時と云されは朗詠<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>愁<sub>ノ</sub>字<sub>ヲ</sub>秋の心<sub>ニ</sub>作<sub>ト</sub>云り

長房<sub>カ</sub>記<sub>ク</sub>云秋来<sub>ハ</sub>悲<sub>シ</sub>万<sub>ニ</sub>葉<sub>ノ</sub>虫<sub>ハ</sub>是<sub>ハ</sub>催<sub>ス</sub>無常<sub>ニ</sub>時<sub>ナレハ</sub>なり得<sub>テ</sub>冬<sub>ヲ</sub>独<sub>リ</sub>歎<sub>ス</sub>

深谷<sub>ノ</sub> 賤<sub>ハ</sub>人<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>問道<sub>ナレハ</sub>文<sub>ナリ</sub>されは秋は無常時也

大かたの哥に秋くるからにかなしき物と思ひしりぬるとは上の無常

の心也是は伊豆内親王長岡に籠<sub>リ</sub>給ける時読<sub>ル</sub>給哥也 我<sub>ハ</sub>為<sub>ニ</sub>にとの哥

同人御哥也物ことをの哥は滋春か哥也是は文記<sub>ニ</sub>春<sub>ハ</sub>生<sub>シ</sub>夏<sub>ハ</sub>盛<sub>リ</sub>秋<sub>ハ</sub>限<sub>ニ</sub>冬<sub>ハ</sub>

無<sub>レ</sub>跡<sub>ハ</sub>山葉の色と書たる心を読<sub>ル</sub>也秋は万の木の葉の散るは限と云り

ひとりぬるの哥は無義染殿の後の御哥也是定の御子<sub>トハ</sub>于<sub>ニ</sub>時三品

中務卿ノ親王光孝天皇ノ第一ノ御子花<sub>ハ</sub>蘭<sub>ノ</sub>宮と申是也家に千番の

哥合せ給し時其時の哥合に御子の読<sub>ル</sub>給御哥也 花蘭の哥合是也

「 41 才

「 40 ウ

いつはとは

雷の坪

さよなか

四葉

ちゝに

くらぶ山

さむからしとは  
さむかるらん  
草にやつるゝ

なべに

いつはとはの哥にいつはとはと云事也是も秋は無常の心を読み  
カシナリ

神鳴の坪とは延喜御時内裏ノ大極殿ノ前に 雷落<sup>イカツチ</sup>タリそこを聴<sup>イカツチ</sup>テ神鳴  
坪と名付人々集<sup>テ</sup>とは躬恒 貫之 友則等時の哥人集延喜四年の

秋立日読<sup>ル</sup>を云也 かくはかりの哥無義 白雲にの哥は延喜御

哥也是は春の日に籠<sup>リ</sup>給たりし時読給也哥無義 さよなか

とは子の時以前を云哥無義此哥業平カ娘初<sup>ハツクサノツナ</sup>草 女の哥也

月みれはの哥にちゝとはあまたの義也 久方の月ノ桂ト月は月去

子の宮殿まで其庭に桂有秋は此かつらの紅葉してあくなる故に

月のひかりまさるといへり其心を百詠ニ云桂ハ生<sup>ル</sup>三五ノ夕ト云り其<sup>レ</sup>ハ月

の桂の紅葉するを云也 秋の夜の哥に くらぶの山トハ大和ニ

有哥ニ無義人のもとにまかりてとは右馬頭橘常主<sup>カ</sup>許也常主ハ

忠房かしうと也忠房ハ其時伊勢守修理大進有忠か子也きりくす

の哥に無義 秋の夜のあるもの哥無義 秋萩の色つきぬ

れはとは萩の色付比<sup>ニ</sup>なりぬれは夜の長也其比に來たれは

きりくすも我<sup>カ</sup>如<sup>ク</sup>ねかて鳴かと読り此哥は陽成の御時勅勘に

て近江国に住ける時によめる遠經の大納言の読給哥也長良卿

の八男也 秋の夜は哥にさむからしとは寒<sup>ム</sup>かるらんと云心也此哥は

染殿の後の御哥也次三首同人の御哥也 君忍ふ草にやつ

るゝとは家のふるくなりつれは必ず忍草生<sup>ハヒ</sup>しける也其心ニ草に

やつるゝと読給也 秋の野の哥に別義なし秋の野にの哥は貫之

娘助か哥也無義 紅葉はの哥は七条ノ中宮の御哥無義

日くらしの哥になへにとはなへてと云事也或は度<sup>タビ</sup>にと云義也此哥は津

国ノありまの湯ヘ行給とて道にて読給重明ノ親王の御哥也

「 42 オ

「 41 ウ

蜩のなく山里の哥は寛平法皇の笠置住給ける時読給哥也哥ニ

無義 待人の哥無義 秋風にの哥にかりの玉章と云事ニ義有

漢明帝ノ御時胡国ノ契多王を打とて蘇武と李陵と二人を

大将として差遣彼ノ国ノ内裏に十重ノ鉄の築地をつけり

二人の將軍はからひてたゝらを以て吹破入ぬ王打れむとしける時

彼王ノ姫宮うつくしかりけるか出向云国は随はむ我親の命を

助給へと云李將軍めて云我を夫とし給へ王を助と云無ト左右

云てつれて入テ城ノ内ニ夫婦となりぬ蘇武此事を無本意ニ思ひて

李をうたむと思フ李此色を見知て蘇武をとらへて雪深き

山に流す三年を経て召返す猶其思フ色見えければ片足を

切ておひ放す田の中にあきてくわひを拾食トス自然ニかりかね

馴ナレ不恐雁に向云テ汝モ生あれば人の歎は知たらむ此ノ札唐の

内裏ノ上林苑におとせとて札を書テ南ニ来雁ノ足に結び付テ其

札ノ詞ニ云 昔者被レケ籠ニ嶮荒峴ニ愁歎悲哀ス今者被レテ拾ニ広田ニ荒ニ

為一足ノ身骸成ニ胡国塵ト魂還テ事ニ君王ニ文書リかりかね此札

を上林園に落ス是を見付て蘇武か札成とて蘇武未生たり

とて蘇武を帰さむか為但將軍ヲ指遣ス胡国ヲ打テ蘇武を帰ケリ

二王昭君胡国ノ狄に取れて行たりしに都を恋て深ク歎ければ

雁前に飛来て南を差して鳴ければ思事を我レニ云伝ヨト云かとして文

を書いて雁の翅に結付リ文集云 昔者備テ錦帳玉楼ニ為リ臣寵

今者寵賤屋苔筵ニ嫁テ下夷ノ無情ケ文 其札都ノ南殿に落たり

是を王御覽して弥哀に思ひ給ひけりされは恋に雁の玉章

を読事也 わか門にの哥に いなおはせ鳥云に四義有一には

夜をさむみ  
ほにあけて

あまのと

六葉

うらひれをれは

ひこの花

どよみ

さやけき三義

雀云<sup>ニ</sup>庭た<sup>ニ</sup>きを云<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>秋いねをおほする鳥を云<sup>ニ</sup>四<sup>ニ</sup>たうを云

此四ノ中ニ<sup>ハ</sup>たうを実義トス万葉云タウト云<sup>フ</sup>稻負鳥野鳴比波北路

乃雁毛思立覽されはたうと雁ト<sup>ハ</sup>同比の物なれは必ずしかれか鳴

は是もこえする也と読也又万葉云 我宿ノソトモノ竹に音立テ、

蘇負鳥人トヨムマテ音聞ナリされは雀云也此哥<sup>ハ</sup>平城ノ王子高積親王

の御哥也いと<sup>ハ</sup>やもの哥<sup>ニ</sup>無義但いとると読<sup>本ニ</sup>不見<sup>見</sup> 是は忠

仁公哥也 春庭の哥同人哥也哥<sup>ニ</sup>無義 夜をさむみのは夜をさ

むしと云事也人丸哥也 寛平御時ト<sup>ハ</sup>同上藤原ノ菅根ト<sup>ハ</sup>日野

三位家宗ノ三男于時治部少輔秋風の哥に声をほにあけて

とは舟と云に付てはと云なせる也ほにあくるとはあらはなる事也

本文同上雁ノ舟ト云事同上<sup>ニ</sup>旅雁浮レ舟碧羅ノ天文又白樂天

西行記云雁船ノ唐櫓落レ窓ニ悟<sup>サマス</sup>夜夢ノ月張ノ弓懸レ枕ニ財眠不<sup>レ</sup>久文

此文雁を舟と云<sup>也</sup>あまのと<sup>ニ</sup>は 万葉云 天戸<sup>トモ</sup>書<sup>サ</sup>天外トモ書<sup>リ</sup>

うき事をの哥無義 山里の哥無義 奥山の哥は寛平の時七

条中宮御哥也 秋萩の哥にう<sup>う</sup>くひれおれはとは<sup>ハ</sup>戯<sup>タヘレ</sup>をれはと云

事也此ノ哥は是貞ノ親王の哥也万葉云美作哉久米野少良山彦

野花遊戯居波日曾暮尔建留といへり彦の花とは口なしの花也

又三条大納言長家ノ哥云<sup>ヲ</sup>君とわかうらひれをれはなる<sup>ム</sup>

をし厭気色也兼てみへなんと読り是にたはふれの義也と

よみとはひ<sup>ニ</sup>くを云也 秋萩のしからみふせての哥は橘ノ清友ノ歌也

さやけきと云<sup>ニ</sup>三義有一<sup>ニ</sup>冷ノ字<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>寒ノ字<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>顯ノ字也六帖集云

文屋康秀ノ哥に 秋の夜の月のさやけく照には風ふかねとも

袖そす<sup>ニ</sup>しさはす<sup>ニ</sup>しき義也紀時文か後撰ノ哥に北山雪吹風

43  
ウ

44  
オ

高砂

ふるえ

玉にぬかむ  
けぬ  
たははに  
七葉  
つゆしも  
をれ

のさやけさに氷のこせる谷川そなき是は寒を讀り万葉云  
真金吹吉備野中山帯爾勢留細谷川野音野佐野氣佐

此哥は顯々をさやけさと云今此古今にも顯々をさやけさと云り

秋萩の哥に高砂の尾上云は必ず播磨にはあらず大方山の高き

をは高砂の尾上と云也 昔あひ知りて伝る人とは清原友房也是は

躬恒但馬のかつまたの湯あみて上りける時友房安芸国下り

けるか播磨のいなみ野に行あひたりける時読る哥也 秋萩の

ふるえとは古枝也返哥有東撰集いれり中勢卿撰也秋萩の

ふるえの花も散置露の情そわすれさるらん 秋萩の

下葉の哥は無義此哥は四条の后ノ里に座しける時よみ給哥也

鳴わたるの哥は忠仁公ノ斗として国経ノ大納言へ兄なりけれども

大原におしすへて弟ノ基経を忠仁公ノ子として関白をゆつる

此時国経世の中を恨むける此雁金ノ鳴けるを聞テ読る歌也

萩の露玉にぬかむとはつらぬかむと云義也けぬとは消ぬると云義也

平城天皇の御哥也 折てみはの哥に枝もたはとはたはむ義也

人丸の哥也 萩か花の哥につゆしもとは秋ノ霜を云也越の

とは丹波国に有是は丹波守に成て下給ひける時読給延喜

第六ノ王子源ノ大納言高明後ニハ左大将ニ成りたりしを母御年にてはて

親王の宣旨を承り給西ノ宮ノ高明親王四品笠部卿是也

文屋朝康ニ于時中納言康秀か父天忍子也哥に無義

名にめてゝの哥序ニ如云布留の今道とはふるの宮の神主成

松子也異本ニハ波松ともいへり 女郎花うしとみつゝそ行すくるとは女郎

花と云に付て読る也 秋の野にの哥に猶むつまじみたひなら

44  
ウ

45  
オ

八葉

なそ色に出て

物へまかり

ける

うしろ  
めたく

なに人か

なくにとは女郎花と云名のむつまじきくる旅にてはなければとも  
女郎花の名にめてゝ留<sup>ヌ</sup>へしと読<sup>ミ</sup>也 小野美機<sup>ト</sup>于時文章

博士但馬守後生<sup>ノチナリ</sup>二男春風<sup>ハルカゼ</sup>弟也 女郎花の哥にあやなくあたの名をや立なむとは女郎花と云に付て読<sup>ミ</sup>也やとりせはとはやとりと読<sup>ミ</sup>へき也寛平六年七月七日哥合也寛平哥合<sup>ニ</sup>前番後番

の哥合<sup>ト</sup>云事有然に寛平六年<sup>ヲ</sup>前番と云<sup>ヒ</sup>九年をは後番<sup>ト</sup>云也

朱雀院の女郎花合はいまた春宮御時也寛平九年七月事也左ノおほいまうちきみとは本院ノ左大臣時平ノ卿也哥無義 藤原の貞方<sup>ト</sup>于時

右中將後<sup>ニ</sup>三条右大臣<sup>ト</sup>号<sup>ス</sup>觀修寺ノ内大臣高藤ノ三男也 秋ならての

哥に天の河原におひぬ物とは此女郎花も七夕ならねとも秋ならては

合<sup>ヒ</sup>難<sup>シ</sup>と読<sup>ミ</sup>り此哥<sup>ハ</sup>寛平九年七月哥合也 たか秋の哥になそ色<sup>ニ</sup>

出<sup>テ</sup>とは女と云名ノ色<sup>ニ</sup>出<sup>テ</sup>うつろふと云也同時哥合也妻恋るの哥是も

女郎花を女と云心を読<sup>ミ</sup>り 女郎花ふき過ての哥は昌泰元年七

月十四日の哥合也哥無義 人のみるの哥別義なし同時ノ哥合也

独のみの哥無義寛平九年ノ哥合也 ものへまかりけるに人の

家に女郎花植たるとは伊勢太神宮へ詣<sup>マユリ</sup>給<sup>リ</sup>し時三条大納言紀是岡

か家ノ女郎花をみて読<sup>ミ</sup>給<sup>リ</sup>彼家<sup>ハ</sup>東山<sup>ニ</sup>有兼覽<sup>ル</sup>ノ王<sup>ト</sup>ハ惟高親王の

御子也 女郎花の哥にうしろめたくとはうしろへたなくと云義也

此哥の心へ女と云花のあれて人なき宿に独<sup>リ</sup>住<sup>メ</sup>いかなる振舞かするらんと

うしろめたなく思也と読<sup>ミ</sup>り 寛平の御時藏人所のをのこともとは

参河守大石富成藏人藤原公俊右馬權助良峯<sup>ヲ</sup>為信<sup>メ</sup>後<sup>ニ</sup>あらため

て為宗とななる藏人頭平貞文等也貞文奥機王<sup>ヲ</sup>孫遠江ノ中將

好風か一男哥に無義 ねなましものをと読<sup>ミ</sup>へしなに人かとは誰

46  
オ

45  
ウ

藤袴ノコト

人かと云義也ふちはかま<sup>ト</sup>ハ蘭也 文選類記云 燕<sup>セキ</sup>曾<sup>ノ</sup>昔<sup>カ</sup>日<sup>タミ</sup>之方見  
未<sup>タ</sup>残<sup>ノ</sup>蘭<sup>コ</sup>花<sup>レ</sup>色<sup>リ</sup>早<sup>ニ</sup>露<sup>キ</sup>遲<sup>キ</sup>水<sup>ニ</sup>誰<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>後<sup>ニ</sup>襟<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>涙<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>尽<sup>ツキ</sup>文意<sup>ハ</sup>成<sup>ト</sup>王<sup>ト</sup>成<sup>王</sup>

太子<sup>ト</sup>軍<sup>セン</sup>時<sup>ニ</sup>燕<sup>ノ</sup>曾<sup>ハ</sup>太子<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>大<sup>ニ</sup>將<sup>ニ</sup>成<sup>王</sup>大<sup>ニ</sup>將<sup>ニ</sup>には範<sup>ノ</sup>騎<sup>ト</sup>と云者也戰時ノ燕

うたれて死<sup>マ</sup>彼<sup>ノ</sup>女<sup>ヲ</sup>深<sup>ク</sup>悲<sup>シ</sup>死<sup>タ</sup>る所の野を尋ねありくに我おりて  
着<sup>ル</sup>たる藤袴<sup>ヲ</sup>むらさきに染<sup>メ</sup>たるか有けるをみて男の死<sup>タル</sup>所<sup>ヲ</sup>と知<sup>ル</sup>

さて彼骸<sup>ト</sup>はかま<sup>ト</sup>とを取て家に歸りて墓<sup>ヲ</sup>築<sup>キ</sup>袴<sup>ヲ</sup>を埋<sup>シ</sup>加<sup>ヘ</sup>其<sup>ノ</sup>墓<sup>ヲ</sup>

九葉

蘭<sup>ノ</sup>生<sup>タリ</sup>怪<sup>ア</sup>掘<sup>ミ</sup>見<sup>レ</sup>埋<sup>ル</sup>袴<sup>ヲ</sup>生<sup>ヒ</sup>とをれり仍<sup>モ</sup>藤袴<sup>ト</sup>と号<sup>ス</sup>藤<sup>ハ</sup>かま<sup>ヲ</sup>を人

に遺<sup>スト</sup>貫<sup>之</sup>か許<sup>ヨリ</sup>延<sup>喜</sup>第七<sup>ノ</sup>姫<sup>ノ</sup>宮<sup>ニ</sup>奉<sup>ル</sup>哥也<sup>ヲ</sup>とりせしとは

やとりせし

彼七<sup>ノ</sup>宮<sup>ノ</sup>の貫<sup>之</sup>に忍<sup>ビ</sup>ひてかよひ給<sup>レ</sup>ければやとりせしとはねたてまつ

る事を云也 ぬししらぬの哥に無義 香こそにはへれとは香こそ

ほにいつる

句へと云事也 蘭そもとはそと云義也 今よりの哥にほに出る

とはあらはるゝ義也此哥は八条ノ右大將源ノ有<sup>リ</sup>国ノ娘<sup>ヲ</sup>を忍<sup>ビ</sup>ひて恋けるか

世の人も知てとかく沙汰しける時読<sup>ル</sup>也 寛平の御時とは同上

花すゝき  
まねく

秋の野の哥に 花すゝきまねくと云事本文有上ノ花橋の段に有

やまとなて

我のみの哥<sup>ニ</sup>やまとなてしことはなてしこを子<sup>ニ</sup>なそらへて読<sup>ル</sup>也なてしこ

しこ

を撫子<sup>ト</sup>書<sup>リ</sup>此意<sup>ヲ</sup>を讀<sup>ミ</sup>「緑なる哥に無義此哥は嵯峨天皇位を押

もゝ草

取て通世の後北山に住給ひける時読給真如親王御哥也俗名

花のひもとて

長岡の親王也 もゝ草<sup>ト</sup>ハ百<sup>ノ</sup>草也花のひもとはそはひもとはしへを云<sup>ヒ</sup>

たはれむ

下ひもとはぬいを云たはれむとはたはふれむと云義也此哥は延喜の御哥也

月草

次作者同<sup>シ</sup>つきくさとはつゆ草也夜<sup>ル</sup>開<sup>タル</sup>故<sup>ニ</sup>月草と云也すらむとは

すらん

摺衣也此哥は大江重光か娘<sup>ヲ</sup>思<sup>フ</sup>召<sup>サ</sup>ける時読給御哥也遍昭か母

のら

の家は八幡<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>是<sup>ハ</sup>淳和天皇の御娘也人か歸りぬるとは人の年

よりたると云義也のらとは野原と書り中略ノ哥也

46ウ

47オ

(約三分余白)

蟋蟀 又ハ菰 異名ハ 筆津虫フデツムシ

貫之哥云

ふてつむし秋もいまはとあさちふに  
かたおろしなるこゑよはるなり

(約三分余白)

古今和歌集卷第五 ○秋歌下

わたつ海

\*7

波の花

常葉山

二葉

かたおかの  
あしたのはら  
かみなみの森  
おもひはかけし

吹からにの哥序の注ニ如云一 草も木もの哥にわたつみと云ニ義有  
一ニ渡津海書り是は渡ルなとに限レリニハ広原ノ海書り是は大方の海の  
名也万葉云渡津海野道古曾見祢塩野山指出賀磯尔露立  
渡留 長能 記云是は後撰集仮名序受テ書ル詞ニ云大和詞ニ始ニ蘇  
我郷稲田姫ニ発ニレリ広原海ノ下照宮ニ文書リ又六帖集ニ云  
もろこしは国を隔さかひにてわたつうみこそ路はしるけれ有馬皇子  
哥也今康秀か哥は大方ノ海を云ワわたつ海也波の花と云は波ノ散花  
に似タリト云也 日本記哥ニ云 常 尔春哉立覧宇祢野野之越野水  
海波野花見又春部ニ此本文見 浪の花にそ秋なかりける  
とは浪の花ハ春ノ気色にて秋ノ木草ノ替トモ秋とはみへすと云也秋哥  
合しける時トハ元慶八年ニ紀ノ長谷雄卿ノ家に五百番の哥合しける時ノ事也  
紀ノ淑望トハ于時民部卿中納言長谷雄卿の一男也哥ニ無義但シ常  
葉山トハ山城ニ有霧立ての哥にかたおかのあしたの原とは大和に有  
あしたの原とは畔下原ト書リ人丸の哥也 神無月の哥にかみなみの  
の森とは大和ノ竜田に有竜田ノ明神より南なる故に神南の森ト云  
是は貞元親王の哥也清和第三皇子也 ちはやふるの哥におもひ

47ウ

48オ

48ウ

おなしえ  
四季を四方  
にあつる

霜露の物を  
染る事

三葉

もる山  
かさとり山

さや山  
四葉  
はゝその紅葉

うつしうへは

はかけしとは神ノ紅葉なれば折ランとはおもひかけすと云家持か哥也貞観ノ御時

とは清和ノ御時也 上ニさふらふをのこ共とは業平行平有常勝臣也

勝臣于時伊賀守後 生子也哥におなし元は同枝也西こそ秋の

はしめ也ければ四季を四方にあつるには西へ秋ノ方也其心ヲ読り

秋風の哥に無義但シいろつきにけりと可レ読白露ノ哥ニ無義但シ露の

物を染 云事長能記云詠宴未尽晚秋影染露ニ染ル霜ニ西覧ノ

菊湿レ雨湿レ浪東岸ノ松書り 又六帖集云 白露の染つくしたる

紅葉はをなを色そへてさす日影哉と読り露も物を染ル也

秋の夜の哥に無義 秋の露の哥に無義此哥は七条の中宮ノ御哥也

もる山ト近江に有漏山書り哥無義近江ニテヘリ山ト云也雨降はニの

哥にかさとり山とは山城の笠置を云也日本記云天武天皇彼山ニテ

狩し給けるに高キ峯より馬を馳落かけより落給けるを山神き

給へる笠のつゝを取へて落奉らすして助ケ奉ル聽て宮を造テ奉崇メカ

さきの北ノ宮是也是よりして彼山を笠取山と云神の社のあたり

を行とは賀茂ノ社也ちはやふるの哥の心は神のちからも不レ叶いかきの葛杪と

いへは聽て紅葉すると読也 雨降はの哥に行かふ人の袖さへそてるとは

紅葉の色に行かふ人の袖もてると読ル也 ちらねともの哥は七条の

中宮の御哥也哥に無義 大和国にまかりけるとは友則寛平の

御時春日ノ官人に成てかよひける時の事也さをの山とは大和ニ有

哥無義秋霧の哥に無義但シはゝその紅葉とは母そと云木の名也

坂上是則トは淡路ノ廃帝後胤石見守為忠ニ孫三河守定盛か子也

于時大内記哥に無義此哥は定文か家の哥合也人の前裁とは遍昭か花

山ノ家の前裁也哥にうつしうへはの意はうつし植たらは秋なき時こそ

49  
ウ

49  
ウ

うへしうへは

さかすとも根は有て又こむ秋は咲なむと読り家隆ノ云うへしうへはと有是はうへしうへたらは秋なき時へさかす花こそちらめ又根さへかれもそすると読り 寛平の御時菊のはなをよみ給とは

寛平元年九月九日仙室を造り山岳に景氣を造りて菊をしけく

立ならへて時の哥人達を召テ哥よませ給ける時の事也哥人トは

貫之 友則 敏行 素性等也久方の雲の上とは内裏を云

久方の雲の上  
菊を星ニ  
似タリト云リ

雲母ハ菊の名白浪ハ花ノ異名也此哥は未殿上ゆるされさりけるにトは此時敏行は下位の内記にて昇殿せさりしか兵衛ノ佐に

下位の内記

任して読ル哥也下位ノ内記とは未内記ならずして内記ニ可レ成定ル云也

老せぬ秋

露なからの哥に老せぬ秋トハ菊は仙葉なれば露なから折ラハ菊

五葉

水なるへし是を服ニ仙人と成て老せぬ秋久かるへしと云植

ふきあけの

造りて菊植たりし時の事也ふきあけの浜に菊うへたると云るは

ふきあけの  
浜

つくり物也菅原朝臣トハ北野ノ天神也于時右大臣贈太政大臣也

哥無義 仙宮ニ菊をわけて人のいたれるとは是も造り物也

同レ上ニ ぬれてはすの哥は菊水の心を讀り素性トは遍昭清水ニ

詣りける時四歳斗なるおさなき物をみ付テ子としたりし人也

抑此人を化生の人と云事は後世ノ人知レリ源三位頼政雨の降たる日前裁

に向て哥を詠して居たる処に黒ッ疲たる僧一人来リ誰人そと

問ニ素性ト答フ頼政縁より向ていかなる哥か御哥に秀哥と思食候と云

答云天神の御跡をこそ読候へと云てかきけつ様ニ失イつくに御座ト

問ければ質へなくして音はかりにて北山ノ頭リ靈崛と答さて時の人

天神の御親ノ  
コト

50  
オ

50  
ウ

大沢の池

心あてに

六葉

仁和寺

寛平法皇

へみ

仙人ノ化したりと知<sup>ん</sup>されはぬれてほすの哥も我身の有様を讀<sup>り</sup>

と云り天神跡を繼とは天神此度はぬさも取あへすの哥の時素性手

向にはつ<sup>つ</sup>りの袖もきるへきにと讀たりし事を云也 菊の花の

もとにて人<sup>ヲ</sup>待<sup>マテ</sup>ると云も同時ノ造<sup>リ</sup>物也花みつゝの哥は菊の下に居

たれば白妙の袖かと思ゆるを讀<sup>り</sup> 大沢の池のかたにと云もその時ノ

造<sup>リ</sup>物也大沢の池ハ山城に有 一本の哥無義 世の中のはかなき事を

おもひけると云は友則同<sup>キ</sup>撰者なりしか延喜五年三月に死たりけれ

は其哀をおもひける時の事也哥<sup>ニ</sup>花よりさきとしらぬ我身とは花

より先<sup>ニ</sup>死にやせんすらんと云心なり次に心あてとはおしはからふ義也

置ま<sup>と</sup>わけるとは菊も露も白<sup>ハ</sup>ければ何<sup>ト</sup>わかすと云也 色かはる

の哥に無義此哥は重明ノ親王の御哥也仁和寺とは光孝天皇の仁和

年中に建立し給事也彼御子宇多ノ天皇おり居の後御出家有て

寛平法皇<sup>ト</sup>号<sup>ス</sup>寛平九年十月二日御出家有法名入覚仁和寺<sup>ニ</sup>住<sup>シ</sup>

給ひけり御室の始なり菊のめしけるとは昌泰三年九月に仁和寺<sup>ニ</sup>

菊ノ花ノ会を始て人々に哥をめしける也 哥に秋をきて時こそ

有<sup>ハ</sup>けれとは秋より後もさかりのあれはこそうつろふ色はおもしろ

けれと讀<sup>ル</sup>也 さほ山の哥の心は紅葉の散ぬへき間よるも見

よとて月は照すかと讀<sup>リ</sup>是は伊豆内親王に年来仕<sup>ッ</sup>ける程

に仁和元年九月十二日内親王薨<sup>ハ</sup>給<sup>ハ</sup>ければ其思に閉籠けるを仁

和御門より頻<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>召<sup>サ</sup>ければ夜の間に髪をそりおろして佐保

山ノ中に庵<sup>リ</sup>結<sup>テ</sup>住<sup>シ</sup>ける時讀<sup>リ</sup>周防守藤原隆成入道ノ哥也

時の人彼隆成は内親王<sup>ニ</sup>忍<sup>テ</sup>かよひ奉<sup>リ</sup>けると云り哥<sup>ニ</sup>へみとはへし

と云義也宮仕久<sup>ツ</sup>つかまつらて山里に住けるとは仁明天皇ノ御時勅勘を承<sup>テ</sup>

「 51 オ

「 51 ウ

てる日の光  
いわかき

七葉

山の錦

から紅に水  
くゝる

散とまかふに  
八葉

竜田姫

北山<sup>ニ</sup>閉籠たる時の事也関雄于時因幡大掾<sup>ナ</sup>冥<sup>ナ</sup>名<sup>ナ</sup>大臣<sup>ナ</sup>孫左衛門

督浜成か男也 おく山のいわかき紅葉散ぬへしとは我身のいまた盛<sup>リ</sup>

なるに王<sup>ニ</sup>モつかふまつらて徒<sup>ニ</sup>死<sup>ニ</sup>なむと云也てる日の光見<sup>ル</sup>時無<sup>ク</sup>てとは

王をも見奉らてと云也 いわかきと云に二義有<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>いとわかき紅葉と云

是は初紅葉を云也<sup>ニ</sup>ハ岩垣の紅葉と云岩岸なと<sup>ナ</sup>云殊<sup>ニ</sup>あやうき処<sup>ナ</sup>紅葉<sup>ト</sup>

云義也今此哥はいとわかき義也竜田河の哥は序<sup>ニ</sup>如云<sup>ナ</sup>聖武天皇竜田<sup>ニ</sup>

行幸なりし時の哥也 次の哥は同し御時の丸<sup>ノ</sup>哥也 恋敷はの哥は

衣通姫<sup>ノ</sup>哥也是は允恭天皇<sup>ノ</sup>暫<sup>ク</sup>かよひ給はざりし時読<sup>ル</sup>也 秋風に

あへす散ぬるの哥は遍昭通世<sup>ノ</sup>始に読<sup>ル</sup>哥也 秋はきぬとは秋の始<sup>テ</sup>

来<sup>ニ</sup>ハ非ずさひしき宿のあきたるを秋にそへて読<sup>ル</sup>也延喜<sup>ノ</sup>御哥也

哥無義ふみ分ての哥は小野篁配流の時隠岐国にて読<sup>ル</sup>哥也哥無義

秋<sup>ノ</sup>月の哥無義貫之か哥也 吹風の哥無義七条の中宮<sup>ノ</sup>哥也

霜<sup>ノ</sup>たて露のぬきこそその哥に山<sup>ノ</sup>錦とは紅葉を云文選云織<sup>レ</sup>霜<sup>ニ</sup>露<sup>ニ</sup>

紅葉<sup>ノ</sup>錦曝<sup>レ</sup>風<sup>ニ</sup>曝<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>三月<sup>ノ</sup>浜至此文意也 わひ人の分て立寄木

のもと<sup>ニ</sup>ハ遍昭通世<sup>ノ</sup>時の事也哥無義 二条后<sup>ノ</sup>春宮<sup>ト</sup>清和<sup>ノ</sup>

春宮<sup>ノ</sup>御時<sup>ノ</sup>みやす所也哥無義 ちはやふるの哥にからくれなる

に水くゝると云は紅葉<sup>ノ</sup>水のしたをくゝりて洗<sup>ル</sup>を云也此哥は貞観

六年<sup>ニ</sup>貞元親王<sup>ノ</sup>貞保親王<sup>ノ</sup>已上<sup>ナ</sup>清和子也 雲林院親王<sup>ノ</sup>仁<sup>ニ</sup>和<sup>ニ</sup>惟高親王<sup>ノ</sup>なむとの

竜田河に逍遙<sup>シ</sup>座<sup>シ</sup>ける御共<sup>ニ</sup>業平行<sup>テ</sup>読<sup>ル</sup>此哥<sup>ニ</sup>深義有可尋

わかきつるの哥にちるとまかふとは紅葉の散まかふを云也神<sup>ノ</sup>なみの

三室の山<sup>ト</sup>共<sup>ニ</sup>大和に有哥無義 見<sup>ル</sup>人もの哥無義 竜田姫<sup>ト</sup>ハ

竜田大明神也是は地神産火火出見<sup>ノ</sup>尊<sup>ノ</sup>御女アマノ逆玉国押依片息<sup>々</sup>

姫<sup>ノ</sup>命<sup>ト</sup>是は崇神天皇御時より竜田山<sup>ニ</sup>いわぬ奉<sup>ル</sup>秋をまもる神と成<sup>ル</sup>故に

「 52 ウ

「 52 オ

佐保姫

ぬさ

小野

木葉を  
舟ト云

九葉

みてを

山田もる

かりほ  
いなをふせ鳥

ふち衣

紅葉を手向トス一切ノ山ノ神ハ皆是眷属也故ニ主ノ名を借リテ秋ノ山ノ神ヲハ竜田姫ト云  
彼ノ御妹ニ彦天津玉依野中津姫ノ命是は春をつかさどる神と成テ同御代に

さは山ニいわぬ奉<sup>ニ</sup>是<sup>ハ</sup>佐保姫ト云一切春ノ山ノ神皆是眷属也仍テ主ノ名ヲ借テ春ノ  
山ノ神ヲハ佐保姫ト云夏冬ノ主ノ神南ニ<sup>レ</sup>読可尋之ぬさとは紙をこまかに切て

神の前ニまく物もおほぬさトハ切りかけたる四手を云故ニぬさをはちる共まく  
共読也大ぬさをはひまてあまた共よみふしなむとも読也小野トは北山に

有秋ノ山ノ哥に住我さへに旅心ちするとはぬさの散ありくをみれば我も  
心のあくかれて旅に立心地ノすると読リ神なみの山を過て行トハ清原

深養父紀伊国ノ目代ニ成て延喜御時下リける時読ル哥也哥無義 白浪に秋  
のこのはのかへるとは木葉ヲ舟ト云事朗詠ニ一葉舟中乗病身云リ又後漢書云

齋州錢黨河長泉漲<sup>キリ</sup>渡旅七日ノ行混達落<sup>レ</sup>敵ニ<sup>レ</sup>遁<sup>レ</sup>此難<sup>ニ</sup>觀<sup>テ</sup>梧桐ノ一  
葉<sup>ヲ</sup>作<sup>テ</sup>舟船<sup>ヲ</sup>得<sup>レ</sup>渡<sup>コトヲ</sup>混達賢人ナリ蚩尤軍<sup>ヲ</sup>時負手<sup>ヲ</sup>負<sup>テ</sup>落<sup>テ</sup>行<sup>ニ</sup>程<sup>ニ</sup>錢黨河ヲ

不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>渡<sup>コトヲ</sup>文桐ノ葉の水に浮をみて俄ニ舟ヲ作<sup>リ</sup>乗<sup>テ</sup>渡<sup>テ</sup>命をたすかりぬされは  
この葉の舟ニ云事此本文也万葉云真木下次丹生野杣河秋深天一葉

流留赤野曾宇舟<sup>ナカハソウフネ</sup>紅葉はの哥無義 春道列樹トは于時<sup>ナカハソウフネ</sup>  
加賀守本ハ小野氏也小野葛縄か未河内ノ大拯新名か子也哥無義

裏書云家隆哥 しかの浦や関の小河の末とめて花を尋ぬる浪  
のをちかたと読リ関の小河トハ逢坂ノ関より落る河也 いけのほと

りとは広沢の池の辺也哥無義但シ水きよしとは声を可読也たち  
とまりの哥無義但シみてをとほみてと云事也山田もるとは山田ヲ

守也かりほとは二義有一ニハかりの庵ともいひ二<sup>ハカリタルホ</sup>荊<sup>トモモ</sup>穂云也是ノ哥に  
云稲負鳥トハたり也 ほにいてぬの哥にふちころもに二義有

一ニハしつか賤<sup>シキ</sup>衣を云二ニハ物おもふ時きる衣也是は大国の事也漢高祖ノ

153ウ

153オ

図つちは

\*8

夕月夜

崩御ノ時月卿雲客花ノ如クに装束して葬送の御供をしたりければ  
高祖ノ王子胤<sup>イシノコ</sup>候云人王の御歎を浅く思へこそかゝる装束はしたれとて  
しかり給ひければ皆還<sup>リ</sup>て後藤衣<sup>フナコウ</sup>賤衣を着<sup>テ</sup>其<sup>ヨリ</sup>大国<sup>ニ</sup>は哀腸の有時は  
藤ノ衣着也されは思ひする時着<sup>ル</sup>衣を藤衣と云也此哥は賤き衣云也  
二条后御哥並二首かれる田にの哥ひつちとは苅田ノ稻の跡より生<sup>ル</sup>云也此哥は  
二条後の業平か事に依て東山におし籠<sup>レ</sup>テ御座<sup>シ</sup>ける時読給御哥也<sup>もみ</sup>  
ちはの哥に無義 みやこよりの哥無義 秋のはつるとは延喜三年の秋也哥  
無義<sup>ニ</sup> 長月のつこもりとは昌泰元年の秋也 夕月夜<sup>ニツクタ</sup>はゆふさりの月也  
をくら山ト山城ニ有なく鹿の声のうちにや秋ハかへるらんとは程なく暮る  
心地を云也万葉云うたゝねの一夜の夢に一とゝせの暮るはやすき年の  
暮かな是も必ずよ一夜にくるゝ事はなけれとも年のくれやす  
きを云上の哥も此意也 道しらはの哥無義  
(約一行分余白)

古今和歌集卷第六 ○冬歌

竜田山の歌無義 聖武天皇の御哥也 山里の哥は宗子ノ中納言朱雀院

のみやす処をおかし奉<sup>リ</sup>テ淡路の国ニ六嶋と云処の山里ニ住ける時読り其後

延喜ノ御門へ一首の哥を奉<sup>リ</sup>て召返されぬ金玉集<sup>ニ</sup>入<sup>レ</sup>リ其哥云おもひやれ

苦をかたしく袖の上に露も涙もかけぬ日そなき彼みやす所は忠仁公の御

孫長朝<sup>トモ</sup>ノ大納言の御娘也人めもかるゝとはひとめはかるゝと云文也おほ空の

哥は人丸の哥也 ゆふされはの哥に三雪トハ真ノ雪ト書り万葉云 冬野<sup>フユノ</sup>日波真<sup>ヒハ</sup>

雪登<sup>ニ</sup>共<sup>ニ</sup>尔<sup>ニ</sup>積留羅紫比古田野山野加饒野高氣波<sup>ニ</sup>加賀國<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>此哥は

坂上の老女か哥也いまよりの哥につきてふらなむとは相統して降へし

と云義也すゝきおしなみとはおしなひかしなり此哥は惟高親王北

人めもかるゝ

三雪

二葉

つぎてふらなん  
おしなみ

54  
ウ

54  
オ

けぬらし

この川とは  
紛川也

雪け

故郷

雪を花ト  
ヨメリ

白浪の末の  
松山

三葉

ねはかもなく

あさはらけ

四葉

ことく

かれにし

野にすみ給ける時忍ひて参りたりける時雪のふりけ

るに読ル源ノ当純カ娘ノ哥也降雪ニの哥にけぬらしとはきえぬらん

と云り貫之哥也この河トハ粉河也彼川を粉河と云事は河

内国なる人観音を作り奉らんと云願有て霊木を尋けるに

夢想ニ依て紀伊国ニ入リ雪粉流河有其ノ水上を尋て伽

藍を建ツ仍粉河ト号ス雪けの水とは雪消の水也此哥は橘清

友か哥也次の哥同作者也故郷トハ奈良ノ京を云也我宿の哥は

遍昭か哥也哥ニ無義雪ふれはの哥無義雪ヲ花ト紀ノ秋峯ト云ハ

淑人一男也白雪ノ哥ニ巖にも咲花とこそみれとは

長房か紀の文ノ意也文曰雪ハ白ハ巖石見レ花ヲ水青メ池淵ニ卷ニ

緑糸一此文ノ意也みよしのノ哥無義浦ちかくの哥

無義但シ白浪の末の松山こゆと云事序ニ如云一三吉野の哥

は忠峯か伯父榮仙法橋大峯へ入たりけるに便ニ付テ読テ送る哥也

白雪の哥無義雪降ての哥に跡はかもなくとは跡はかりなしと

云義也冬なからの哥無義冬こもりの哥ニ無義

大和国ニまかりける時トハ是則大和守ニ成て住ける時の事也

あさはらけの哥に無義但シあさはらけとはあけほのの事也

けぬか上ニの哥は平城天皇ノ御哥無義梅の花の哥序ニ如云一

小野篁于時参議中納言峯守か一男也花の色に無義

梅の花の哥にことくはことく也雪降はの哥無義

ものへまかりける人とは忠峯カ延喜御時美濃掾ニ成て行シ時也

清水の有所とは逢坂の関の清水也わかまたぬの哥ニかれにし

人とはわかれにし人也年のはてトハ元慶四年也あらたまの

55  
ウ

55  
オ

ます鏡

哥に雪もわか身も降まざるとは年の老ぬを云也雪降ての哥  
史記云 勁松露<sup>ル</sup>歳<sup>ハ</sup>寒<sup>ハ</sup>文意也年のほてとは延喜三年の事  
也哥無義 哥奉れと仰られしとは古今撰<sup>シ</sup>時人々<sup>ニ</sup>哥召<sup>シ</sup>  
時ノ事也 ゆく年の哥にますかゝみと云<sup>ニ</sup>義有一<sup>ニ</sup>ハ<sup>ハ</sup>四方なる  
鏡を云也真角ノ鏡<sup>ニ</sup>ハ鏡の影をみておとろへ行すかたを  
みて日ことにおもひのますを以て増見のかゝみとも云なり  
古今和歌集聞書 以上四季之分尾  
(約七行分余白)

「 56  
オ

「 56  
ウ

「 後見返し  
「 後表紙

注

注\*1 二十丁オモテ上欄に「二」と朱書。

注\*2 二十丁オモテ九行目から二十丁ウラ十一行目まで、文頭に「イヤカキ」と墨で記し、「古今和歌集卷第二…

…省略…：我身のとまましけれ。はてうしと云也」と記されているが、これは書写者の異なる二十一丁オモテ一行目から二十一丁ウラ一行目の「古今和歌集卷第二…：省略…：我身のとまましけれはてうしと云也」の重複書写と思われるため、二十丁オモテ九行目からウラ十一行目にかけて、翻刻本文からは削除した。

注\*3 二十一丁オモテ上欄に「第二」と朱書。

注\*4 二十九丁ウラ上欄に「第三」と朱書。

注\*5 三十二丁オモテ5行目上欄に「山岸文庫」（双辺梓長方陽刻朱印）の蔵書印あり。

注\*6 三十八丁ウラ上欄に「第四」と朱書。

注\*7 四十八丁オモテ上欄に「第五」と朱書。

注\*8 五十四丁ウラ上欄に「第六」と朱書。